琉球弧を旅して

髙野敦志

目次

米軍基地の間を抜けて 1
琉球村と那覇の街 12
竹富島の美ら海 19
石垣島のイトマンジー 25
川平湾は海の花園 34
西表島は日本のアマゾン 40
ひめゆりの塔と沖縄戦 63
ふたたび沖縄へ 74
首里城の幻影 83
御嶽は神々を祀る杜 90

豊見城の海軍司令部壕
「んみゃーち」の宮古島
北谷はアメリカンビレッジ
真栄田岬の幻影
玉泉洞とガラス工房
あとがき

167152139103 99

米軍基地の間を抜けて

　僕が初めて沖縄を訪れたのは、一九九二年の夏、二十代最後の年のことだった。その時が生まれて初めてだった。それまでの僕は、空を飛ぶのも怖がっていたのだ。羽田（はねだ）空港に足を運んだのも、幼児の時に「飛行機が見たい」とせがんで、母に連れられてきてもらって以来だった。

　離陸前は緊張していたが、いざ離陸してしまえば、揺れもほとんどなく快適だった。潮岬（しおのみさき）の沖を過ぎ、奄美（あまみ）大島の上空に来た辺（あた）りから高度を下げた。那覇（なは）空港には午後三時に到着。まだモノレールが開通しておらず、移動はすべてバスだった。

　那覇の街はまだ見ていなかった。とりあえず、名護（なご）方面に移

動することにした。道路が渋滞すれば、二時間ぐらいかかるらしい。両側の広々とした空間を、米軍基地が占めている。基地の間に道路が通っていて、通行させてもらっているといった感じだ。精神的な圧迫がある。沖縄に来れば、本当はまだ日本が独立していないことが分かる。

　案の定、バスが数珠（じゅず）つなぎになっている。街路樹の土を覗（のぞ）き込むと、土の色が赤い。本土の赤土は火山灰が降り積もったものだが、沖縄の赤土は高温多雨が原因とされ、オレンジがかった色をしている。大雨が降れば一気に流れ出し、珊瑚礁（さんごしょう）の海を窒息させてしまう。

　今晩泊まる予定のユースホステルは、真栄田（まえだ）岬にある。国頭（くにがみ）

郡恩納村（おんなそん）真栄田。沖縄の地名が読みにくいのは、元々話されていた言葉がウチナーグチ（沖縄方言）で、古代日本語の方言であり、本土の人間にはちんぷんかんぷんだということもあるが、琉球王国を侵略した薩摩藩（さつまはん）が、異国である琉球の支配を誇るために、「前田」を「真栄田」に、「上原」を「宇栄原」に、「平」を「平良（ひらら）」にというふうに、地名まで異国風に改変してしまったせいでもある。

　停留所を下りて、真栄田岬のユースホステルに向かう。さとうきび畑が一面に広がっている。それが夕日を浴びた海まで続いている。森山良子（もりやまりょうこ）の「さとうきび畑」を思い出す。

　真栄田岬のユースホステルは、その先にあった。入館して部屋の窓から見ると、さとうきび畑の間に、石造りの家のように

点々と見えるのは、先祖代々の沖縄の墓なのだった。門もあり、戸口、屋根まですべて石造りなのだが、窓だけはない。あったら、ちょっと怖いのだが。戸口は外側からしか開かないのだろう。

かつて沖縄では中国南部のように、遺体を火葬せずに埋葬していた。数年後、墓地を開けて骨を取り出し、洗骨（シンクチ）して壺に収めるのだという。それが供養になるというのだ。四月の清明祭（シーミー）には、墓地の前に宴席を設け、親族一同がご馳走を持ち寄り、酒を酌み交わすのである。目に見えないご先祖様も交えて。

ユースホステルに泊まっているのは、二十歳そこそこの学生だった。まあ、ギャップを感じないわけではないが、こちらか

ら声をかければ、結構話に乗ってくれる。気持ちが若いかどうかが大切なのだ。

朝早く起きた。日射しがまだ強くないから、海が青く見える。岬の周りは深いのだろう。だから、ダイビング・スポットとしても人気があるのだ。朝食ではもっぱら潜る話になる。その頃僕は、シュノーケリングを始めたばかりだったから、底なしの海に挑戦する勇気はなかった。

「体験ダイビングをやってみたらどうですか。きっとまた沖縄に来たくなりますよ」

沖縄の海でエメラルド・グリーンに見えるのは、珊瑚礁の内側、浅瀬の部分だけである。珊瑚礁の内側と外側では、まるっ

きり様相が違う。泳いでいる魚の数も、外海の方が圧倒的に多い。講習の話に惹（ひ）かれながらも、今回は旅を中心に考えることにした。

　バスに乗った。海沿いの道を延々と進む。沖縄本島の海は、場所によってはすでに珊瑚礁が死滅している。原因は汚染物質というより、あのオレンジがかった色の土だ。開発によって剝（む）き出しになると、海に流れ込んで珊瑚を窒息させしまうのだ。

　エンジンの音を聞きながら一時間半、国頭郡本部町（もとぶちょう）の国営沖縄記念公園で下りた。ここは一九七五年（昭和五〇）から翌年一月まで、沖縄国際海洋博覧会が開かれていた所だ。まずは沖縄館に入ってみた。ちょうどシーサー（獅子）展をやっていた。

　シーサーと言えば、獅子のことだから、本来はライオンのこ

となんだろうが、極東にはライオンはいない。ゾウならタイやインドにいるから、中国人も見たことがあったんだろうが、東アジアに伝わったライオンは、百獣の王のイメージとはほど遠い霊獣になってしまった。沖縄の赤い屋根瓦を見上げると、シーサーが魔除けとして飾られている。霊獣といっても、顔つきは何だかコミカルだが。

　そういえば、本土の獅子舞でも、獅子頭（ししがしら）に噛（か）んでもらう風習があるが、これも獅子の霊力によって、邪気を祓（はら）ってもらう意味があるそうだ。本物のライオンだったら、人間なんかいちころだろうに。

　沖縄館の中では、琉球王国の歴史が一目で分かるようになっ

ていた。明治の初めに日本に併合される以前は、ハワイ王国のように一つの国だったのだ。江戸時代の初めに、薩摩藩に侵攻される以前は、マレーシアやタイ、インドネシアとの交易で、莫大な利益を得ていたという。

　薩摩による支配が始まると、自由な活動は制限され、二重の重税にあえぐようになった。一方、琉球王国は明（ミン）や清（シン）に朝貢（ちょうこう）を続けていたから、薩摩藩は琉球を通じた密貿易で、利益を独占する形となった。

　表面的には清の属国で、元号も中国のものを使っていたが、実質的な支配者は薩摩藩だった。明治政府は清との国境を画定（かくてい）するため、琉球王国を琉球藩に格下げし、一八七九年（明治十二）に軍と警察を派遣して、沖縄県を設置したのである。最後

の国王尚泰（しょうたい）は、東京への移住を命じられた。これが世に言う琉球処分である。清からの抗議を受けたため、宮古（みやこ）・八重山（やえやま）を清に割譲（かつじょう）する妥協案も出されたが、妥結を見ぬまま日清戦争に突入し、日本と中国に分割される事態は避けられた。

　海岸に出た。真っ白な砂浜に、エメラルドグリーンの海が広がっている。砂の色が白いのは、砂が珊瑚の破片から出来ているからだ。沖には伊江島（いえじま）が望める。平和な光景に見えるが、あの島も沖縄戦の激戦地で、島の六割は米軍基地で占められている。

　水中メガネを使って、海の中を覗いてみた。ピンク色の小魚がたくさん泳いでいる。これがスクと呼ばれるアイゴの稚魚（ちぎょ）で、

塩漬けにして「スクガラス」という名で売られている。島豆腐の上に載せられている奴だ。

　水遊びしたあと、沖縄そばを食べた。そばと言っても、そば粉が入っているわけではない。小麦粉で作られた麺で、うどんとラーメンの中間のような食感だ。スープは鰹と豚の出汁を取ったもので、淡泊でさっぱりしている。醤油と砂糖で煮付けた豚肉は味が濃いめで、スープとのコントラストが生きている。泡盛に島唐辛子を漬け込んだコーレーグースという調味料をかけると、風味が増しておいしい。

　沖縄そばのあとは、シークヮーサーというヒラミレモンのジュースを飲み、小麦粉に卵と黒砂糖を入れて薄く焼いたポーポーや、黒砂糖の代わりにニラや味噌を入れたヒラヤーチー（平

焼き）も食べてみた。癖のない、素朴な味わいの菓子である。

　バスの時間が気になったが、水族館だけは見ることにした。大きな鮫は迫力があったが、何と言っても圧巻は、巨大なマンタ、和名オニイトマキエイの泳ぐ姿だった。三角形の翼で悠然と泳ぐ姿は、素晴らしいの一言に尽きる。黒い翼の端から端までは、三メートルはあっただろう。これは台湾に近い、西表島の周辺海域に生息するという。

琉球村と那覇の街

ユースホステルに泊まって、翌朝、近くにある琉球村に行ってみることにした。「歩いて行けるんですよ」と同じ部屋の人が言って、近くまで連れていってくれた。琉球王朝時代の古い沖縄文化に、じかに触れられるらしい。いわゆるテーマパークである。

最初に見たのはハブとマングースの決闘。もともと、沖縄にはマスグースがいたわけではないが、多くの死者を出していた毒蛇を退治するために、野山に放されたのだという。そのマングースが、沖縄の固有種、飛べない鳥であるヤンバルクイナを襲うようになったというから、人間が自然をコントロールする

ことは難しい。

ガラスケースに敷居があって、ハブとマングースが入れられていた。敷居が外された瞬間、マングースはハブの喉元（のどもと）に噛みついた。こうして窒息させたあと、ガリガリと食べてしまうらしい。噛みついたまま、ハブとマングースは絡（から）み合い、何回もぐるぐる回った。

ただ、ハブは革がベルトやハンドバッグに、肉や内臓には強精作用があるので、マングースに食べさせてしまうわけにはいかない。ガラスの中に箱を入れると、マングースは瞬（また）く間に、逃げ込んでしまった。マングースにとっても、ハブに噛まれれば命を失うわけで、好き好んで決闘しているのではないのだ。

琉球の古い民家の間を歩く。漆喰（しっくい）で固められた朱色の屋根瓦

を見ると、中国風の造りに見えるが、家の中には畳や襖（ふすま）、障子（しょうじ）があって日本風。中国を父として、日本を母とした折衷（せっちゅう）の文化なのだ。琉球という名は中国風、沖縄という名は日本風。方言なら「ウチナー」だけれども。

水牛が飼われているところなど、中国南部かベトナムあたりの風景を思い起こさせる。水牛は石臼（いしうす）につないで回らせ、さとうきびを搾（しぼ）らせている。その汁を煮詰めれば黒砂糖となる。お腹（なか）が空（す）いたので、シークヮーサーを飲んで、黒砂糖入りのポーポーを食べた。

琉球村で長居してしまったために、那覇に着いた頃には、日が西に傾きかけていた。バス路線がよく分からず、重い荷物を背負っていたので汗だくになった。迷った結果、波上宮（なみのうえぐう）に行

った。海の彼方（かなた）にある理想郷、ニライカナイの神々に祈った聖地だったが、沖縄固有の信仰と熊野権現（くまのごんげん）への信仰が融合して、社殿が造営されたのだという。

千三百年代には琉球国王が鎮護（ちんご）国家のために、真言宗の護国寺を別当寺（べっとうじ）として併設した。このあたりは、神仏習合（しんぶつしゅうごう）の本土の宗教と似ているが、庶民レベルでは仏教は広まらず、ユタという巫女（みこ）による神下（かみお）ろしがもっぱら行われた。

那覇の中心街、国際通りをうろついた。みやげ物屋や飲食店がひしめいている。タコス料理を食べて時計を見たら、びっくりした。経度がかなり西なので、東京よりは一時間ぐらい日の入りが遅い。午後七時だというのに、校庭では部活をしている

し、八時を過ぎても西の空は赤く燃えている。安謝（あじゃ）橋から那覇新港まで歩いた。

どうしてかだって？　船に乗るんだ。船っていったいどこへ？　出港は午後八時だった。甲板（かんぱん）に出て街灯のともりだした街並みを眺める。那覇の街はゆっくりと遠ざかっていく。突き進む先の海は真っ暗だ。寂しいし、ちょっと心細い感じだ。僕はそれを「死出の旅」になぞらえてみた。

親しい者を残して、一人で別世界へ旅立つ……やがて、暗い空に満天の星が輝きはじめる。関心は外の世界から、内なる懐（なつ）かしい光景に惹きつけられていく。こんな旅を、生を終えるたびに、幾度となくしてきたかのようだ。

前方に唯一、白い光が見える。海上に浮かぶ標識か、それと

も、すれ違う船の明かりだろうか。近づいてくるようで、目を凝（こ）らすと、依然として彼方にある。僕はそれを、漂流する幽霊船の放つ光に見立てた。

たちまち、暗闇の中から灰色の船体が現れる。それが幻（まぼろし）であると知っていたが、夢うつつの目には、甲板の手すりから丸い船室の窓まで、ありありと見えたのだ。ただし、そこには人影がない……。

はっとして、甲板の下を見ると、この船が放つぼんやりとした光が、黒い波を立てながら海を切り裂いている。その裂け目が現れるたびに、引き込まれるような誘惑を感じる。船から人が落ちるというのは、こういう時なんだろう。ぶるっと身震いした。

船室に戻って横になった。疲れているのに眠れない。意味の分からないことで悩んでいる。熱でうなされているときのように。眠ったかと思ったら、大地震が起こった夢を見た。起き上がると、船室の中は寝静まっていた。もう夜中である。僕は誘惑に駆られて、また甲板に出た。風は強く、波の音はすさまじいが、海面には航跡以外ほとんどうねりも見られない。星のきらめきが引き立っていた。

竹富島の美（ちゅ）ら海

夜が明けた。甲板に出る。凪（な）いだ海が広がる。どこまでも広がる青空。強い日射しが差してくるが、朝の海はまだ涼しい。水平線の彼方に石垣島が見えてきた。時折、トビウオが姿を見せ、翼みたいに胸びれを広げ、グライダーのように滑空する。落ちそうになると、水面をジャンプして、二十メートルぐらいは軽く飛んでいく。

その時、水中に灰色の細長い影が見えた。イルカだった。数頭が宙に飛び上がり、また海の中に消えた。好奇心に駆られてか、周りにいた十頭が次々に顔を出す。意外に小柄なので、まだ子供なのかもしれない。目が笑っているように見える。

午前十時に石垣港に接岸した。勝手が分からず、町の中をうろついてしまった。竹富島（たけとみじま）行きの船は三十分に一本出ている。玄米のお握りを食べて高速艇に乗り込んだ。とにかく、船とは思えないスピードで、船縁（ふなべり）や船尾に一メートルもの波しぶきを立てて進む。

十五分ほど船に乗ると、平坦な小島が見えてきた。石垣島を訪れる人の多くが竹富島に寄るのは、近さのためだけではない。港に下りると、マイクロバスに乗るか、水牛の牛車（ぎっしゃ）に乗るのが普通らしいが、白い砂利（じゃり）道を徒歩（とほ）で上っていくことにした。これが一番自分の性（しょう）に合っている。

島の一番高いところに出た。といっても、なだらかな丘の天辺（てっぺん）なのだが。そこでジュースを飲んで一休みする。琉球王国時代

の面影（おもかげ）を残す赤瓦の家並み。南国の光と風雨に耐えて、茶色く変色した板壁。タイムスリップしたような光景が、人々が生活する中で保存されているのだ。離島であるために、空襲には見舞われたものの、地上戦で焼き払われることはなかった。積み上げられたごつごつした岩は、周りの珊瑚礁から削り取られた岩であり、無数の穴は雨水で石灰分が溶け出したからだろう。岩の一つ一つはただ積み上げただけのものだが、長い時を経（へ）て偉容すら感じさせる。

赤い花びらに黄色い蘂（しべ）を垂らしたハイビスカスに、白地に黒いまだらのアゲハ蝶が戯れている。光が強いので砂利道を見るだけで、目がちかちかしてしまう。しかし、人影が見えない。島の人は一番暑い時間は、家の中で休んでいるのだろうか。そ

ういえば、猛毒のハブもヤブ蚊も、日中は木陰（こかげ）に潜んでいるというから。

　目指しているのはゴンドイ浜。白い砂浜が一面に広がり、膝（ひざ）より浅い海が数百メートル沖まで続く。その先の珊瑚礁で、外海の波は砕けるのだ。

　海の色はマイルドなグリーン。ちょうど抹茶ミルクといったところか。浅いために、ぬるま湯ほどに温まっており、魚の姿はまれである。珊瑚礁との境辺りまでいって、ようやく数匹見かけたくらいだから。それもおととい目にしたスクばかり。熱帯魚らしいのには、まだお目にかかれない。

　海水パンツに着替えて、海の中で戯れる。こういう所には、恋人と来るべきだろう。仰向けになり、水の中を漂う。目を開

けた瞬間、焼けるような光に目がくらむ。閉じると眉間（みけん）の辺りに、緑色の輪が赤いスクリーンに浮かび上がる。この残像に意識を集中していた。ここにいるという感覚を、ただ肌に触れる感覚だけで得ようとしていた。

　白い砂浜の向こうには、小浜島（こはまじま）が見える。朝ドラの『ちゅらさん』の舞台だけれども、僕が立っていたのは、その十年ほど前のこと。まだ二十代の男だった。

　ハンググライダーをやっているのか。まばゆい空を翼が滑っていく。彼方にうっすら見えるのが西表島。半日かけて石垣島にたどり着いたのに、ろくに見物もしないうちに、他の島のことばかり気にかけてる。嫁さんいるのに、通りの女にばかり色

目使ってる男のようだな。
　ぶらぶら歩いて、また港の方に引き返していった。南国特有の美しさがあるが、この地方ではありふれた風景なのだろう。マンネリズムと美の融合なんて言ったら、この若造がと怒られそうだが。とにかく、本土の人間はエキゾチズムを感じる。まあ、明治の初めまでは異国だったわけだし。

石垣島のイトマンジー

　高速艇で石垣港に戻ってきた。バスを待っている間、売店でISHIGAKIという文字と、椰子（やし）の絵が入った紫色のシャツと短パンを買った。随分派手な感じがしたが、南の空は開放的なので、それほど違和感はなかった。
　泊まることになっているトレック石垣島ユースホステルは、島の東側の星野にあった。牧草地帯の間をバスはのんびり走っていく。停留所で下りると、すぐに看板が見えてきた。庭木に囲まれた赤い屋根のアットホームな感じの施設。僕よりも十ほど上の若夫婦が、ペアレントさんだった。
　建物の周りにはハブが棲（す）んでいるそうで、窓を開けていたら、

実際に入ってきてしまったとのこと。食堂の天井にはヤモリが数匹棲みついていて、チュチュとネズミみたいな声で鳴いている。

　このユースホステルには、自分の家のように長期滞在している初老の人や、十日近くも泊まって、連日銛（もり）で魚を捕っている青年もいる。

「海人（うみんちゅ）を目指してるのよ」と、ペアレントの奥さんが言うと、無口な彼は照れていた。

　僕は秦野（はだの）市から来たという人と、近くの海へ行ってみることにした。その人は若々しくて、三十歳ぐらいに見えるのだが、実際はずっと年上らしい。自由な生き方を選択したのだろう。

　前日に買ったど派手なシャツと短パン姿に着替えた。山道を越えてまっすぐ行くと、大きな岩が海に向かって突き出している。午前九時頃だったので、潮がまだ満ちていた。おじさんは釣り糸を垂れていたが、全然釣れない。僕は素っ裸になった。見ている人間なんか誰もいやしない。岩場の上に立って、水平線の彼方を眺めていた。

　沖にある珊瑚礁は、天然の防波堤となっているらしい。ここからはまだ見えないが。真下の海水はほとんど動いていない。

「潮が引くと見えてくるよ」

　おじさんが言った。彼方から波の砕ける音がする。珊瑚礁が隠れている辺りから。その先には少し黒い雲が見える。目を凝らすと、細い糸のような物が下がっている。

「あそこは雨が降っているんだよ。本土じゃどこで雨が降ってるかなんて分からないだろ」

　たしかに、これほど視界が開けていなければ、雨が降っているところと、晴れているところが、画然（かくぜん）と分かれているさまは見られない。

　背後から雨が迫ってきた。やばい！　僕たちはユースホステルに向かって走った。しかし、何て足が速いんだろう。はるか沖で降っていた雨に追いつかれてしまった。本降りとなる前には駆け込んだが。

　実は昨夜、洗濯をして干しておいたのだが、漁をやっている青年が取り込んでくれていた。こういう家庭的なところが、ユースホステルの良さなのだ。束（つか）の間の友情だと分かっていても。

　ペアレントの奥さんが用意してくれた弁当を食べた。雨が上がったところで、若いおじさんと一緒に、また海岸に出かけていった。潮はすっかり引いていた。魚のいっぱいいるイトマンジー（糸満地）という小島に行くことになった。かつてはその島で、海人（うみんちゅ）が寝泊まりしていたらしい。

　シュノーケルと水中メガネを持って、干潟（ひがた）の上を歩いていく。石灰化した珊瑚は、割れた陶器のように鋭いので、足を切らないように、サンダルなどではなく靴をはいていく方が安全だ。

　イトマンジーは地続きになっていた。水中メガネをつけ、シュノーケルを口にくわえた。こつとしては、シュノーケルは適度の強さで噛むこと。噛みすぎると、かえって海水が口に入っ

てくる。呼吸はゆっくりと規則的にし、吐く方を主とすること。間違っても鼻から吸ってはいけない。鼻から海水が入って、ひどく苦しい思いをする。

足にフィン、人工のひれをつけると、一気に泳ぎが楽になる。足を数回動かすだけで、滑るように進めるのだから。人間が魚になるには不可欠の物だ。また、ゴムで足を保護するという意味もある。

足の届かぬ深みに進んでいく。水中メガネに映ったのは、観賞魚のようにかわいい小魚、青白いルリスズメダイである。頭部が紫で尾の方がオレンジの小魚も目を引いた。ロイヤルドティーバックという名前だそうだ。黄色と黒の縦縞（たてじま）のクラカオスズメダイも、珊瑚の周りに生息する小魚である。

小さなウツボが、こちらの姿に驚いたか、さっと岩蔭に身を隠した。岩の間には針が長くて黒いウニが潜んでいる。いちばんグロテスクなのが、巨大な黒っぽい縞のナマコだった。オオイカリナマコというそうで、一瞬ウミヘビかと思ってしまった。

「食べられるんですか」

「まずくて食えないって話だよ」

水中メガネを通して覗くと、数メートルはあるように見えてしまう。自分の目で魚を追っていくと、魚になったかのような気分になる。無数の小魚に目を移すと心がなごみ、いくら潜っていても飽きないのだった。

おじさんは四時頃に帰ろうと言っていた。だけど、僕は「も

う少し潜っていたい」と言い張った。四時半頃に戻ろうとしたら、すでに潮が満ちてきていた。イトマンジーは島に戻っていたのだ。

　腹近くまで海水に浸かりながら、対岸まで戻らなければならなかった。外海だったら、こんな危険は冒せないけれども、沖縄では珊瑚礁の内側では波がない。ただ、足元の生物をうっかり踏んづけたりしないように進んだ。

　夕食のあとは、ペアレントさんの話を聞いていた。ご夫婦で話しているのが、まるで漫才のようだった。なごやかなところが、このユースホステルのいいところだ。二人はここの自然に魅せられて、本土から移り住んだらしい。

「風速七十メートルも吹くと、電柱が倒れてしまうのよ。十日

も停電したことがあってね。トタン屋根も飛ばされて、歩いてたおじいの首を切ってしまったのよ」

　ナイチャー（本土の日本人）には、とても現実とは思えない話だ。僕の疲労も限界に達していた。目をつぶると、昼間見ていた熱帯魚の姿が見えた。

川平(かびら)湾は海の花園

朝食を終えた。疲れていたので、九時半頃までのんびりした。ペアレントの奥さんに「川平(かびら)湾は見ておきなさい」と言われたので、とにかく行ってみることにした。アットホームな感じで気に入ったユースホステル「トレック石垣島」だったが、ついに別れの時が来た。

　石垣港にいったん出て、コインロッカーに大きい荷物を預けた。身軽になったところで、川平湾までバスに乗った。ゆるいカーブを進むうち、ミルクを溶かした抹茶のような海が見えてきた。ここが石垣島で随一の美しさを誇る海なのだそうだ。

　バスを降りた途端、容赦ない真夏の日射しに目がくらんだ。

あまりの光の強さで、目を開けていること自体が苦痛なのだった。グラスボートに乗るように言われていたので、人影がない船着き場に下りていった。これじゃ船は出ないのかなと思ったが、おじさんに話すと出してくれるとのことだった。

　船底はガラス張りだった。緑色なのでそれほど鮮明には見えない。沖に停泊すると、大きな熱帯魚がたくさん現れた。色とりどりに泳ぐ姿に目を奪われる。海岸の珊瑚は石灰化して、生きているものは少なかったが、赤、紫、橙(だいだい)の珊瑚は大きく、悠然と枝を伸ばしている。

　海の花園(はなぞの)と言っても、珊瑚はれっきとした動物である。熱帯魚にとっては隠れ家(が)となるが、プランクトンを食する虫の集合体である。もし、こんな物が陸上にいたら、ちょっと無気味か

もしれない。虫や小鳥を食べる木々が風に揺れていたら。
　確かに、イトマンジーと比べたら、美しさや豊かさの点で格段に上なのだが、珊瑚の間を自由に泳ぎ回るような感動はない。一体感がないのだ。テレビの中継を見ているのと同じである。じゃあ、潜ってみればと言われそうだが、川平湾は潮流の流れが速く、底では足を引きずられるという。
　警告を無視して入った若者が、命を失ったという話を、ペアレントの奥さんが話していたのを思い出した。川平湾の海の花園には、魔物の罠（わな）が仕掛けられているのだ。
　グラスボートを下りて、レストランに入ったところで、イトマンジーに連れていってくれたおじさんと会った。そこで一緒のテーブルについて川平定食というのを食べた。天麩羅（てんぷら）に刺身、

酢の物、汁、豚の耳（ミミガー）の和（あ）え物など。
　前の日にお世話になったお礼を、きちんと言わぬままにユースホステルを出てしまったので、こうして挨拶（あいさつ）できたのは運がよかった。そこには同じ部屋に泊まった青年もいた。
「狭い島の中で行くところも大体決まっているからね」とおじさんは言っていた。
　食事が終わったところで、旅の無事を祈って解散した。ふたたび、石垣港のバスターミナルに戻った。船の時間まで史跡巡りでもしようと思った。そこで港の近くにある、琉球王国時代の八重山の頭職（かしらしょく）の邸宅、宮良殿内（みやらどぅんち）という武家屋敷を訪れた。
　驚いたことに、ここにはまだ人が住んでいた。赤瓦を漆喰で

固めた琉球時代の建物で、一八一九年（嘉慶(かけい)二四・文政(ぶんせい)二）に建てられた。首里(しゅり)の士族の屋敷をまねたもので、部屋の数は十二間。周囲は石垣に囲まれている。庭は日本風の枯山水(かれさんすい)となっており、中国と日本の文化を吸収した沖縄の風土を反映している。

　ちなみに、その頃の琉球王国は、薩摩藩の支配下に置かれていたものの、清朝に朝貢していたため、中国の元号を使っていた。ただ、日本文化の流入は早く、平安時代の末には仮名文字も伝わり、漂着した僧侶によって、日本の仏教も支配層に伝えられた。

　その後、臨済宗(りんざいしゅう)の桃林寺に詣(もう)でた。創建は一六一四年（万暦(ばんれき)四二・慶長(けいちょう)十九）で、第二尚氏の尚寧王(しょうねいおう)によるもの。八重山

には寺社が一つもないことを、薩摩側に指摘されたためだという。山門は赤瓦を漆喰で固めた琉球様式で、日本の禅寺とは雰囲気が異なる。観音菩薩を祀(まつ)る本堂も赤瓦だから、中国の寺院に詣でたような印象を受ける。

　一七七一年（乾隆(けんりゅう)三六・明和(めいわ)八）の明和の大津波で、八重山の人口の三分の一が死亡した。桃林寺も損壊したが、山門の仁王(におう)像は崎枝湾(さきえだわん)の海岸に打ち上げられた。また、第二次大戦でも被害を受けているから、創建当時の建物が残っているわけではない。

西表島（いりおもてじま）は日本のアマゾン

午後三時の船で石垣港を発（た）った。一昨日寄った竹富島の横を抜けていく。標高が低い平らな島である。パラダイスのような美しい海岸、ゴンドイ浜はあの辺りだろうと考えていた。西表島の島影は見る見る大きくなっていく。

船浦（ふなうら）のいるもて荘に向かった。そこはダイバーがよく泊まるユースホステルだ。部屋に荷物を置いて、リュックサックを背負い、一人で散歩することにした。右手に見える船浦大橋まで歩いて行く。入江にかかる海中道路である。

橋の上から岸を見ると、広大な干潟が広がっている。三本の川が入江に注ぐのだが、潮が引いている今は、一つの川になっ

ている。入江の端から端までは、一キロはあるのだろう。平らな干潟を川は自由気ままに、うねるように流れている。

ただ橋が出来たために、干潟は二分されてしまった。岸の方をよく見ると、干潟はU字型にえぐられており、その奥にマングローブの林が続いている。つまり、かつての入江は川が運ぶ土砂（どしゃ）に埋められていき、少しずつ林が海にせり出してきているのである。マングローブというのは、海岸に生える樹木の総称で、満潮時には根元に海水が押し寄せるため、葉から塩分を排出する機能を持っている。塩害を克服した植物なのである。

浅い海はたくさんの魚が群れ、弧を描くように戯れている。そこで橋から干潟に下りてみることにした。夕方というのに、日射しがまだ強い。川の水も温められてぬるい。メダカほどの

小魚がたくさん泳いでいる。砂地の上にいるのはシオマネキ、これはオスの片側の鋏（はさみ）だけが、巨大化した小蟹（こがに）である。利き腕が大きくなるから、左右のいずれの鋏が大きくなるかは、個体によって異なっている。潮が満ちてくると、大きな鋏を動かすさまが、ちょうど潮を招いているようだからと名づけられた。

　丸っこい形の小蟹は、ミナミコメツキガニ。これは蟹のくせに横歩きせず、前進するところが変わっている。しかも、群れで移動するから、ちょうど軍隊が突撃しているさまを思わせる。ただ、こちらは海の水が大嫌いで、潮が押し寄せると、ドリルのように回転して、砂地に潜ってしまうので、逃げ足の速さも半端（はんぱ）ではない。

　目の前にはボートが一艘（いっそう）、ロープにつながれていた。数百メ

ートル上流に目をやると、ボートで川をさかのぼっている人たちが見えたが、今は鳥の声と虫の声、時折魚たちが立てる水音しか聞こえない。

　ふいに海の方からしずしず音がした。潮が満ちてきたのだ。それも見る見る押し寄せてくる。砂漠に降った豪雨のあとのように。ミナミコメツキガニの退却が始まった。この速さでは、砂の中に潜り込むしかないわけだ。小さな川がちょろちょろ流れていたのに、今や大河のような川幅になっていく。

　僕は橋の上に戻っていた。小川が大河の夢を見る。それが実現する懐（ふところ）の広さ、自由闊達（かったつ）さがこの島にはあるのだ。すでに川は塩を含んで汽水となり、海の魚たちが押し寄せているはずだ。広大な入り江がしばしの間に見せた変貌（へんぼう）に、僕は息を呑む

ばかりだった。西表島に来たのだという実感がみなぎっていた。すでに干潟も半ば海原（うなばら）に戻り、あの蛇行した流れも間もなく海の中に消えるだろう。

　日はまだ高かった。しかし、時計を見てびっくりした。午後六時半？　経度を考えれば、東京と一時間の時差があっても、おかしくないのだから。沖縄の子供は夜遊びが好きで、午後八時に待ち合わせたりするとか。本土の時間に付き合わされていることや、すっかり日が沈まなければ暑くてしょうがないといったことが、関係しているのだろう。

　いるもて荘に戻った。このユースホステルのいいところは、百八十度視界が開けた高台に建っているという点だ。沖合には

鳩間島（はとまじま）が見える。夕食を終えたのは、午後八時頃で、日が沈んだばかりだった。すでにシルエットだけになった小島には、灯台の明かりがともっていた。

　西の空には細い三日月が昇った。海にせり出した高台には電波塔があり、その辺りを境にして、紫がかった赤の淡い光が、悲しいまでの美しさを放っていた。上空から闇が下りて星が瞬き出しても、水平線はいつまでも黄色い残照で輝いていた。

　朝食を済ませると、いるもて荘を引き上げ、上原港に近いユースホステル、みどり荘へ移った。十一時に浦内川探険に出発する人がいるというので、僕も参加させてもらうことにした。

　みどり荘のワゴン車に乗り込んだわけだが、併設された民宿

に泊まる女性ばかりで、ユースホステルに泊まるのは、男では僕だけだった。そこで、ヘルパーをしている青年と、もっぱらしゃべっていた。

　車は浦内川のボート乗り場に着いた。川幅を見て仰天した。島の中を流れる川とは思えない。川と言うよりは、入江のような広がりを持つ。それもそのはずで、深緑の川は海水と混じった汽水で、濁ったままよどんでいる。

　船に乗り込むと、エンジンがスピードを上げてさかのぼる。川の流れは大きく蛇行している。両側にはマングローブの林が続いている。まだ潮が満ちているため、竹箒（たけぼうき）のようなオヒルギの根は、水面から現れていない。

　それにしても、ジャングルを縫うように大河が流れるさまは、日本のアマゾンと呼ぶにふさわしい。これを見るために、はるばる遠い西の島まで来たんだな。岸の両側にはソテツや、パイナップルに似たアダンの木も生えている。アダンと言えば、ヤシガニの好物である。そいつはヤドカリの仲間で、体重が一キロを超す巨体である。棲む生物からして本土とは全く異なる。かつてはマラリアが蔓延（まんえん）した点でも、日本の中の異界なのだ。

　二十分ほどして、川上の船着き場に着いた。そこからはジャングルの奥につながる山道を上っていく。ヘルパーの青年は、函館（はこだて）出身なのだそうだ。ここでは夏休みの間働くつもりらしい。ただ、仕事はきつく、レンタカーの洗車までやらされている。休憩は昼からの数時間で休日はない。しかも日当は……。楽園

のイメージとは、ちょっと違うようだ。
　山道を上っていく途中で、女の子たちが大声を上げた。ハブでも出てきたのかと思ったが、ちゃんと足が生えている。でも、長さは四十センチ近い。キシノウエトカゲというそうだ。こんな大きな奴が、身をくねらせて出てきたら、男でもぎょっとするものだ。
　本土のトカゲのように、長さが十五センチほどのも出てきたが、おなかからしっぽの先までが、サファイアみたいに青い。絶滅が危惧されているイシガキトカゲで、余りに美しいので見とれてしまった。熱帯では人も動物も派手な装（よそお）いをしている。強烈な日射しの下では、それだけはっきりした色でなければ、相手を見分けられないからかもしれない。

　マリユドゥの滝は、直角に二層になったもので、ひび割れた岩を滑るように流れている。「マリユドゥ」とは、丸い淀みという意味だそうだ。上った所でヘルパーの彼に、写真を撮ってもらった。二時までに船着き場に戻らなければならないそうで、ゆっくりしていられない。
　さらに密林を縫って、細い山道を上っていく。上流にあるカンビレーの滝が見えてきた。カンビレーとは「神の座」を意味するという。岩盤でできた急坂を、轟音（ごうおん）を立てて流れ下るさまは息を呑む。洗濯板のように磨かれた岩の所々がえぐられて、井戸みたいに水がたまっている。
　ポットホールというのだそうだ。細い筋の流れが注ぎ込んでいるのを見て、穴がどのようにできたか分かった。窪（くぼ）みに小石

がはまり、注ぎ込む水で回転させられ、穴を深くえぐっていったのだ。

段状の急坂を下る滝など、今まで見たことがなかった。エネルギッシュな水の謳歌(おうか)に圧倒されていた。弁当を食べたあと、引き返すことにした。途中、マリユドゥの滝が見下ろせる展望台に寄った。滝の全体像をとらえるには、上から俯瞰(ふかん)した方がいい。緑に囲まれた谷底から、直角に下る二層の滝の響きが鈍く伝わってくる。

船着き場に戻ると、そのまま浦内川を下っていく。ワゴン車に乗り、みどり荘に帰ってくると、部屋には誰かの荷物が置いてある。夕食までは時間があるので、自転車を借りてサイクリ

ングすることにした。

船浦港には下りずに、そのまま南側に行ってみることにした。道はどんどん海から遠ざかっていく。ちょっと不安になったので、海に向かって伸びている細い砂利道を下っていった。行けども行けどもアスファルトは現れず、草むらは時折がさごそと鳴る。ハブが潜んでいるのかもしれなかった。どうやらその先は、琉球大学の農業研究所に通じているらしい。

元の地点に戻り、船浦大橋を彼方に見ながら進んでいくと、小さな川が見えてきた。自転車を止めてぼんやり干潟を眺めていた。海の方からぐんぐん海水が逆流してくる。これはいくら見ていても見飽きない。旅の最大の目的も果たしてしまい、いよいよ終盤に差しかかってきた。

みどり荘の部屋では、感じのいい青年がベッドに寝っ転がっていた。横浜の会社の寮に住んでいるとのこと。屈託なく話してくれるので、一緒に食事をしてビールも飲み、シャワーも浴びた。時間が過ぎるのも忘れて、話し込んでいった。

彼は八重山民謡を聞きたいと言った。外に出て携帯ラジオのスイッチを入れた。ところが、入ってくるのは台湾の放送ばかりだった。聞こえてくる歌謡曲も、どこか中華風である。

「ここは那覇よりも台湾に近いんでしょ」と言いながら、彼は笑っていた。

翌日はよく晴れ上がり、南国の強い日射しで、存在すべてが白く色あせていた。同室の彼はレンタルバイクを借りて、浦内

川の方へ出かけていった。僕は昨日の女性たちと一緒に、島の北端にある星砂の浜へ、みどり荘のワゴン車で送ってもらった。

なぜ星の形の砂が出来たかというと、バキュロジプシナという有孔虫の殻が集まっているからだという。生きているときは肌色をしているが、死ぬと白いカルシウムの殻だけが残る。ロマンチックな形をした砂は、単細胞生物の死骸（しがい）だったのだ。

沖には鳩間島がかすんで見える。潮が引くまでにはまだ時間があった。レストハウスでマンゴージュースを飲んだあと、木陰で腰にタオルを巻いて水着に着替えた。シュノーケルの方は、まだ十分に使いこなせてはいない。浅瀬で軽く練習してから昼食を取った。

潮が引き始め、沖のリーフも見え始めた。借りたフィン（足

ひれ）は歩くときには不便で、つまずいてしまいそうになった。そこで、フィンを手に持ち、ゴム草履（ぞうり）で珊瑚の上を歩いていったら、足を何ヶ所も出血してしまった。珊瑚は割れた陶磁器のように鋭い。結局、歩きにくくてもフィンをはいているのが安全だということが分かった。

ただし、フィンをつけていると浮力がついてしまい、なかなか立ち上がれない。その際は立ち泳ぎをするか、剣道の蹲踞（そんきょ）の姿勢になるように体を起こせばいい。なお、すぐに立てるとは限らないので、シュノーケルでの呼吸は、きちんと足がつくまで続けること。

水中で気をつけることは、シュノーケルをくわえた口をゆるめてはいけないということ。とはいっても、強く噛むとかえっ

て隙間が出来てしまい、水が口に入ってきてしまう。息はゆっくり口から吸う。間違っても、鼻から吸ってはいけない。レンズの中に水が浸入する羽目となる。呼吸が浅くなって苦しくなったときは、慎重に、かつ大きく息を吐いていく。水の上で漂っていれば、また泳ぎ続けられるので。

フィンは泳ぐためには必需品で、これがあれば、魚と一緒に水中を泳ぎ回ることができる。ゆっくり大きく水を掻（か）いていくのがこつである。緊張することなく、気をゆるめない。リラックスしながら、注意力を怠（おこた）らないといった感じだ。

潮がすっかり引いていた。沖のリーフまでたどり着き、外海の方でちょっと泳いでみた。ただ、いくら先に進んでも生きた

珊瑚は見えない。波も打ち寄せてくるし、ちょっと怖くなった。振り返ると、岸は数百メートルも彼方にある。これ以上外海に浸かっていてもしかたないので、リーフと磯の間にある小島の周りを泳いでいた。そこはようやく背が届くくらいの浅瀬で、所々深みになっている。

　この頃にはシュノーケルの使い方にも慣れ、数分間は続けて泳ぎ続けた。水中の撮影ができる使い捨てカメラを使って、黄色や青のスズメダイなどの小魚が泳ぐさまを撮影した。海底の砂浜に穴を掘り、夫婦で暮らしている魚もいた。ピンクとグリーンのまだら模様の魚は人なつっこく、僕のフィンの周りで遊んでいる。

　魚たちは海底の微生物を食べているらしかった。白地に目玉模様のついたジャノメナマコ、タコやイカの子供も泳いでいた。ウミユリの仲間も見えた。細長い針を持つウニの一種であるガンガゼや、有毒のニセクロナマコの姿も見かけた。

　我を忘れて泳ぎ続けた。水族館で見る魚たちは、こちらに対して無関心である。ところが、水中では同じ空間を共有している。時として危険な、奇怪な魚ぐらいにしか思われていないのだろうが。こうして時の流れがない、生き物の感覚を取り戻した時が過ぎていった。

　みどり荘のユースホステルに戻ると、同室の彼が帰ってきていた。浦内川の方には行ったのだが、あの大トカゲ、キシノウエトカゲが見られなかったことを残念がっていた。その後、星

砂の浜にも行って、僕のことを探していたそうだ。その頃、僕は沖でシュノーケルをやっていたのだろう。

夕食を取ってから、彼と上原の漁港に行ってみた。集会所ではちょうど、三線（さんしん）の練習をしていた。それとともにお囃子（はやし）も聞こえてきた。「安里屋（あさとや）ユンタ」だろうか。彼の聞きたかった八重山民謡が、こうして生の形で聞けたのだ。

空はすでに暗く、最初にこの島に来た時のように三日月が出ていた。岸壁につながれた船の前で、お互いを写真に撮り合った。沖は黒い輪郭にしか見えなかった。そのとき、がさがさっと音がした。あわててシャッターを切ったのが、果たして何が写っているだろう。イリオモテヤマネコ？　それともハブか？

部屋に戻ると、エアコンをつけた。夕食前に買っておいた泡

盛を酌み交わした。アルコール度三十度はかなりきつい。烏龍茶（ウーロンチャ）で割ると香りが分からなくなるので、一緒に飲んでちょうどよかった。

それから、仕事や趣味、旅について語り合った。彼は北海道に行ったことがないので、知床（しれとこ）半島を小雨降る中、自転車で走ったことや、嵐の夜のユースホステルでの交歓（こうかん）、礼文島（れぶんとう）の「汗と涙の八時間コース」の冒険などについて話した。北海道は涼しくて、空気が澄んでいて、視界がくっきりと見える。沖縄は光が強すぎて、目の前が白くなってしまうことなど。

彼は会社の寮に住んでおり、鍵をかけていないので、戻ると同僚が入り込んでいることがあるそうだ。

「プライバシーなんてないですよ。鍵をかけておくとかえって

怪しまれる」

酔って眠くなっていたので、突然「あの辺は浅いぞ」と叫んでしまった。目の前に珊瑚礁の幻影が見えたためだった。まだ水中を泳いでいる感覚が、体の中に残っていたからだろう。

朝食後、同室の彼はバスで出発した。牛車が浅瀬を渡る由布島(ゆふじま)や、南部の仲間川(なかまがわ)の方に行くらしい。僕は自転車を借りて、この島に来た日に訪れた船浦大橋の所まで走ってきた。西表島の大きさを実感したのもここだった。

まだ潮が満ちているので、あのとき予想した通り、干潟は入江と化して、蛇行した川は水面(みなも)に没している。海中道路から島の方を向くと、ボートが二艘見えるし、弧を描く岸沿いを、ハ

イキングの若者が七人ほど歩いている。潮の満ち干って、まるで地球が呼吸してるようだと思った。人間とは比べものにならないほど、大きくゆったりとした息だが。もっとここにいたい……。ようやく島の空気にも慣れてきたというのに。もう時間がない。まだこの島の一部しか見ていないのに、早くも別れの時が迫っているのだ。

みどり荘に戻って、出発の準備をした。車で送ってもらうのはやめ、上原港まではゆっくり歩いていくことにした。荷物が重いので、少し行くと休んでは風景を眺めた。道ばたにはヒルガオが咲いている。雲が広がってきたので、意外と涼しかった。港に着いて岸壁から海面をのぞき込むと、無数の魚が群れをなして泳いでいた。

石垣港行きの船に乗り込んだ。いよいよ別れの時が来た。僕はまた一人になってしまった。船は猛スピードで西表島から遠ざかっていく。まだほとんどこの島について知らないのに。いつの日か、また訪れることができるだろうか。

ひめゆりの塔と沖縄戦

石垣港に戻り、行きとは違って、石垣空港から飛行機に乗った。那覇空港まで五十分。全くあっけない。春海(はるみ)ユースホステルに泊まったのだが、夕食を作るのはやめたと言われ、やむなく外食。道路は渋滞しているし、これじゃ東京と同じじゃないか。

朝食後、那覇バスターミナルへ行った。本島南部の戦跡に向かうことにした。途中の道路もかなり渋滞していた。糸満(いとまん)のバス運転手は親切で、ひめゆりの塔の所で下りて見学してから、平和祈念堂に行ったらいいと教えてくれた。同僚と話しながらだったが、ウチナーグチ（沖縄方言）だと全く分からない。そ

れをヤマトグチ（日本語）で言い直してくれた。
　ひめゆりの塔のバス停で下りる。日射しが強く、目をまともに開けていられない。塔の前には赤い花が山のように供（そな）えられている。その前で記念撮影している観光客が多いが、僕にはその感覚がよく分からない。そこには資料館があり、沖縄戦の歴史が分かりやすく説明されている。ひめゆりの塔のちょうど地下が、女学生たちが従軍看護婦の見習いとして働いていた洞窟（どうくつ）となっている。
　スピーカーからは、大砲と銃弾の耳をつんざく音が響いてくる。その前で元ひめゆり学徒隊だったおばあさんが、当時のことを物語っていた。
　負傷兵の手当をするのが、自分たちの仕事だった。しかし、

傷口からはウジが湧き、兵士は生きながらにして餌食（えじき）になっていた。日本軍が壊滅状態になると、歩くことができない負傷兵は見殺しにされていった。ある者は青酸カリを含んだ水を飲まされ、ある者は銃で頭を撃（う）ち抜かれた。洞窟に隠れた兵士の多くも、アメリカ軍によってガス弾を撃ち込まれ、ほとんどが命を奪われた。奇蹟的に生き延びたのは、わずか数名だったという。
　昼食の後、平和祈念堂を見学した。堂の中央には漆塗りの巨大な仏像が安置され、天井には星がきらめいている。周囲の壁には平和をモチーフにした絵が飾られている。
　平和記念堂の美術館を見て回った。そこで印象に残った絵画

について記そう。黄色い夕焼けをバックにした守礼門。夏の海に浮かんだ赤い花。雪原で夜明けを眺める鹿。光の中しぶきを飛ばして駆け抜ける天馬。

記念式典が行われる広場を過ぎ、平和祈念資料館の方に向かった。そこで見られたのは、沖縄戦で起きた悲劇の連続だった。一九四五年（昭和二十）、米軍の本島上陸が近づいた頃、米軍の戦艦が慶良間諸島を包囲すると、島民の多くは自決を余儀なくされた。ネコイラズ、殺鼠剤を持っている家はうらやましがられた。これを大量に摂取すると、吐いて助かってしまう。それがないうちでは、家族同士、ナイフで殺し合った。夫が妻や子供、老人を刺した。そして、仲間同士でも。

首里が陥落すると、日本軍は喜屋武半島へと転進した。退却

という言葉を使うと、国民の士気が下がるとして「転進」という言葉がニュースで流されていた。そこで米軍を疲弊させ、国体の護持、天皇制の存続という条件を米軍に呑ませた上で、終戦に持ち込もうとしたのだ。

「本土の人は沖縄の人の心が分からない」と言われる。それは沖縄が国体護持のために捨て石にされたという思いがあるからだ。極限状態に置かれた日本兵は、沖縄県民から食料を奪い、抵抗する場合は射殺したという。ウチナーグチを使った場合は、スパイ扱いされた。洞窟に隠れていて赤ん坊が泣き出した場合、米軍に見つかるのを恐れて、兵士が絞殺したという。日本兵に殺された沖縄県民は、百名以上いたとされる。

琉球処分で日本に併合されてから、沖縄戦まで六十年も経っ

ておらず、言葉も文化も異なることから、数々の差別も受けていた。求人の張り紙に「朝鮮人、琉球人お断り」と書かれた写真が残っている。物を頭に載せて歩く風習からして、本土の人間は対等な相手とは見ていなかったようだ。

最も印象に残った写真は、焦土（しょうど）にさらされたままの老婆の遺体。恐らく、琉球処分前後に生まれ、強制的に日本人にされたのだろう。琉球国王尚泰は東京に連行され、士族も平民も日本語の学習を強制された。首里の王宮も寺院も破壊され、故郷が焼き尽くされていくのを見ながら、命を奪われたのだろう。

僕は陰鬱（いんうつ）な気分になった。正直な気持ちを言えば、ここには来たくなかった。石垣島や西表島での思い出が、悲惨な歴史を目（ま）の当たりにして、吹き飛んでしまった気がしたからだ。だが、

本土の人間としては、沖縄に来たからには、歴史から目を背（そむ）けることは許されない。

那覇に戻ってからは、国際通りをぶらついた。ユースホステルに戻る前に、泊にある崇元寺（そうげんじ）跡に行ってみた。そこは十六世紀に建立された臨済宗の寺院で、琉球国王の位牌（いはい）が祀られていたが、沖縄戦で破壊されてしまい、現在は石門のみが再建されている。

翌朝もよく晴れていた。首里に行ってみたが、一九九二年（平成四）の時点では、沖縄戦で破壊された首里城は、ちょうど再建している最中だった。実は翌年から放送された大河ドラマ『琉球の風』の撮影のため、工事が急ピッチで進められていて、城

門の外からしか、そびえ立つ赤茶の宮殿を仰ぎ見ることができなかった。守礼門も塗り替えているところだった。城壁の下には円鑑池（えんかんち）という池に浮かぶ弁財天堂（べんざいてんどう）があった。ここには朝鮮国王から贈られた『高麗版大蔵経（こうらいばんだいぞうきょう）』が収められていた。この池の水は、上の首里城と隣の円覚寺（えんがくじ）から流れてきたものらしい。

円覚寺というと、鎌倉にある臨済宗の寺院を思い出すが、こちらは鎌倉の物を模して建てられた。琉球国王第二尚氏の菩提寺（ぼだいじ）だった。琉球では仏教は庶民に広まらなかったが、支配階級は日本から渡来した仏教を信仰していた。総門、三門、仏殿などの壮麗な伽藍（がらん）が存在したが、沖縄戦ですべて破壊された。戦後は跡地に琉球大学が建てられ、大学移転後は再建が進められている。

国際通りに戻った。豚肉と野菜の煮付け、それに小さな沖縄そばと赤飯がついてる定食を食べた。おみやげを買い込み、那覇バスターミナルまで歩いた。間もなく、今回の旅も終わる。

天気予報によれば、台風が沖縄に近づきつつあるということだ。ちょうどいいあんばいに、旅の終わりが来たということだ。にわか雨には遭（あ）ったものの、これほど晴天が続いたのは幸運だったと言うしかない。

今回の旅は、琉球村など沖縄の風俗に触れた最初の三日間、竹富島、石垣島、西表島で光と海、川の魅力を満喫（まんきつ）した五日間、沖縄の歴史と現実に触れた最後の三日間に分けられる。僕にとって忘れられないのは、那覇港を出てから石垣空港に至るまで

の大自然だった。都会に住む人間の知らない異界を旅した感じがする。鏡を見ればびっくりするが、すっかり南の島の住人みたいに、浅黒く日焼けしている。

まだ、沖縄のことは知らないことだらけだ。訪れていない島も多い。首里城はまだ工事中だったし、戦跡に関しても一部しか見ていない。まだ旅が終わっていないのに、次の旅のことを考えていた。

那覇空港から飛び立った。浮き上がった途端、坂道を上るように傾く。はるか下に那覇の街、そして港が見える。沖の小島には珊瑚礁が延びている。さらに高度が上がると、下には雲が広がっている。

潮岬の上空あたりまでかなり揺れた。やはり、接近している

台風のせいなのだろう。翼が小刻みに震えている。御前崎（おまえざき）を過ぎると、青い富士山がかなり下方に見えた。乗客は憑（つ）かれたように見とれている。日本に帰ってきたという気がした。沖縄は今は日本であるが、やはり本土とは異なる文化の世界だった。

ふたたび沖縄へ

それから五年経った。季節は前回と同じく七月の末。折良く、台風が抜けた直後だった。那覇空港に着くと、バスで名護方面に向かっていた。泊まったのも真栄田岬のユースホステル。記憶していた通りの風景である。さとうきび畑が一面に広がり、彼方に水平線が海岸と平行して延びている。屋根と入口のある死者の家、沖縄独特の墓も並んでいる。二十代だったあの頃から、まるで時間が止まっていたかのようだ。

このユースホステルは、現在は真栄田岬ダイバーズハウスとなっているが、当時も宿泊客の大半はダイバーだった。同室となった青年はきさくで、海の中で体験したことをいろいろ話し

てくれた。ダイビングでは三十から四十メートル潜るということだ。

「ハタなんか大きな岩を動かすし、ウニでも針をバリバリ折って食べてしまいますよ。鋭い歯にやられたら、指なんか食いちぎられるでしょうね。ダツは光に向かって突進してくるから、剣のようにダイバーの体に突き刺さってしまうこともあるらしいんです」

美しいだけの世界ではないようだ。動物たちの生存競争が繰り広げられる、生と死の隣り合った驚異の世界なんだろう。話を聞きながら目をつぶると、光景が眼前に広がっていく気がした。

次の日もよく晴れていた。近くの海で泳ぐことにした。裏手には遊歩道が延びており、断崖を見下ろしながら進むと、真栄田岬にたどり着くというわけだ。手前にあるきつい石段を下りると、ダイビングをするためのスポットがある。平らな珊瑚が数メートル続いたあと、一気に数十メートルの海底に落ち込んでいるという。

　白波が結構立っている。ここは引き潮で命を落とす人が少なくないらしい。シュノーケルと水中メガネ、フィンをつけても、僕の泳ぎでは心配だ。そこで岬の先にある砂浜まで行くことにした。

　そこには二組の親子連れしかいなかった。関西弁の一家と、金髪の欧米人の母子だけ。白波はリーフの外側で立っている。

これを見て、西表島の星砂の浜を思い出した。海水パンツに着替え、シュノーケルを装着して海に入った。小さな珊瑚には青い小魚、ルリスズメダイや、クロハタの幼魚なども泳いでいた。銀色の鱗（うろこ）を光らせる奴は、なわばり意識が強いらしく、ぐるぐると同じ所を巡っている。

　岸から十メートルほどの辺りで泳いでいた。もっと沖まで行ってもよかったのだが、木陰に置いたままの荷物が気にかかっていた。もうすぐ潮が引き始めるので、展望台に戻ってシャワーも浴びた。

　いったんユースホステルに戻り、サイクリングすることにした。もう十二時過ぎていた。ところが、あたりに食堂らしきも

のがない。そこで、かつて訪れた琉球村に寄ってみることにした。

レストランで、豚肉とかまぼこを細く切って載せた八重山風そば、それにクファジューシー(炊き込みご飯)、モズク酢を食べた。一時二十分から、レストランの横にある広場で「迎恩」と題して、三線(さんしん)による沖縄民謡の実演が行われた。

「唐船(とうしん)ドーイさんてーまん　いっさん走(は)えーならんしや　ユーイヤナ　若狭町村(わかさまちむら)ぬサー瀬名波(しなは)ぬタンメー　ハイヤセンスルユイヤナ」

現在沖縄の人が話しているのは、「ウチナーヤマトゥグチ」、沖縄風の日本語だから、本土の人が聞いてもまだ分かる。だが、民謡は生粋(きっすい)の「ウチナーグチ」だから、ちょっと聞いてもちん

ぷんかんぷんだ。

「唐船ドーイ」の歌詞は、「中国船が来たと騒いでも、一目散に走り出さないのは、若狭町村の瀬名波のおじいさんだ」という意味に、独特の囃子詞(はやしことば)がついてくる。沖縄風のラップみたいなもの。太鼓のリズムが非常に軽快で、意味がよく分からなくても、気分を高揚させてくれる。泡盛でも飲んでいれば、波に乗る気分で自然と手足が動き、カチャシーが始まる。

園内を見て歩くと、目に入る物すべてが記憶からよみがえった。五年前とほとんど変わっていない。水牛に臼を引かせて、黒砂糖を作っている。ハブとマングースの闘いもやっている。滋養強壮に効くというハブ粉も売っていた。試しになめてみたが、死んだトカゲの味といった感じで、このままじゃちょっと

無理だ。毒のない大蛇をお客の首にかけている。いくら蛇革（へびがわ）で金運が上がると言われても、生きていて動くのはちょっとごめんだ。

祭りの様子を表した人形にも目が向いた。爬竜船（はりゅうせん）に乗り込んだ漕（こ）ぎ手らが速さを競うハーリー。海の向こうの理想郷、ニライカナイから神を迎えるウンジャミ（海神祭）では、弓矢や槍を用いてイノシシや魚を捕らえ、舟を漕ぐ所作（しょさ）をすることで、大漁豊作を感謝し、無病息災を喜ぶのだという。

オバー（お婆さん）やアンマー（お母さん）のウチナーグチを聞いているのも面白い。これが古代の日本語に近いと言われても、ピンと来ないのだが、いかにも田舎のお婆さんの言葉といった感じで懐かしい。

琉球村には長居してしまった。時計を見ると、すでに午後三時半を回っている。大河ドラマ『琉球の風』のテーマパークに行ってみることにした。一九九三年（平成五）の前半に放映されたこのドラマは、江戸時代の初期、薩摩藩の侵攻により、幕藩体制に組み込まれつつあった琉球王国を描いている。首里城の再建に合わせて制作されたと言える。

大河ドラマの屋外スタジオとして建てられた施設は、撮影後はテーマパークとして公開された。ブームが去った後なので、大きな駐車場には数台の車しかなく、巨大な園内もガラガラだった。紅型（びんがた）をまとった女性が琉球舞踊を舞っているのは良かったが、三人でカチャシーをやるのは、余りに寂しすぎやしない

か。
琉球の武家屋敷は、中国風の赤い屋根瓦と、風通しを優先した壁の少なさに特徴があるが、畳や障子は日本式である。一方、明（ミン）からの冊封使（さっぽうし）を迎えた天子宮は全くの中国式で、国王や王妃の部屋も日本の物とは趣（おもむき）が異なっている。王妃の部屋の柱が真っ赤なのに驚いた。赤をおめでたい色とした中国文化の影響と思われる。本土で赤がよく用いられたのは遊郭（ゆうかく）である。福建から移住した商人も多く、道教の神天妃（てんひ）を祀る道観（どうかん）も建てられていた。

首里城の幻影

沖縄に王国が生まれたのはいつか。伝説では源頼朝（みなもとのよりとも）の叔父である為朝（ためあさ）が、保元（ほうげん）の乱の後に琉球に渡り、初代の王舜天（しゅんてん）になったとされる。これなどは、源義経（みなもとのよしつね）が蝦夷地（えぞち）を経て大陸に渡り、成吉思汗（ジンギスカン）になったというのと同じで、英雄の死を悼（いた）む幻想が生み出したものだろう。

歴史的には、沖縄本島に中山（ちゅうざん）、山北（さんほく）、山南（さんなん）という小国家が生まれたが、十五世紀初頭、中山の王尚巴志（しょうはし）が本島の統一を果たした。版図（はんと）は北は奄美群島から、西は与那国島まで広がったが、尚寧王（しょうねいおう）の時代に薩摩藩の侵攻を受け、奄美群島を割譲させられた。明や清に朝貢を続けて王国は存続したものの、実

質的には島津氏の支配下に置かれた。一八七九年（明治十二）の琉球処分で、尚泰王（しょうたいおう）が東京に連行されて、四五〇年続いた琉球王国は滅亡した。

第二次大戦の頃まで首里城は存在したが、沖縄戦で焼失。一九五〇年（昭和二五）から一九八二年（昭和五七）まで、琉球大学が置かれていたから、約半世紀を経てようやく復元が進んだことになる。前回訪問した一九九二年（平成四）の段階では、再建の工事が急ピッチで進められていた。

御庭（うなー）に通じる奉神門（ほうしんもん）をくぐった。琉球王国の時代の朱塗りの正殿（せいでん）が、目の前に姿を現した。いかにも威厳を感じさせる姿は、かつてここが一つの国であったことを物語っている。一地方を支配する領主の城は、幕府への遠慮もあって外見は簡素なもの

だが、首里城は国王の居城であるから、権力をはばかることなく誇示している。

琉球士族の着物をまとった係員のほかは、御庭にはほとんど人影がない。南殿（なんでん）は展示室になっている。中国風の傘や山水画、螺鈿（らでん）などの宝物が陳列されていたが、何と言っても見ものは正殿である。一階には国王の座である御差床（うさすか）があり、畳の上に腰を下ろした王が、正殿前に並んだ臣下に命令を発せられたのだろう。

二階はかつて国王以外は、男子禁制であった。朱色を基調に金色に装飾された椅子の上には、「中山世土（ちゅうざんせいど）」という額が掲げられている。中国の皇帝から「琉球国中山王」として封じられた証（あかし）である。琉球の島々は中山王の封土（ほうど）であるという宣言

である。様式はほとんど中国式で、臣下への号令も中国語で行われた。使われていたのも中国の元号である。

一八七一年（明治四）の廃藩置県は、本土では大きな抵抗もなく行われた。大名は参勤交代で、一年おきに江戸で生活していたから、東京住まいになることへの拒絶反応も少なかったのだろう。

その年、琉球王国は琉球藩に、琉球国王は琉球藩王に格下げされたが、琉球王府はこれまでの慣例は維持されるものと考えていた。これは日本への併合を進める上での、過渡的な措置だったのだが。

一九七九（明治十二）の琉球処分をもって、琉球王国はつい

に滅亡した。首里城の明け渡しを強要され、東京に連行された国王尚泰の無念は、察するに余りあるものである。琉球王国再興のために、清に支援を求める士族の運動が起こり、日本と清の国境問題へと発展した。一時は琉球王国を二分して、先島を清に割譲する案が日本側から出されたほどだった。

その後、北殿を見てから漏刻門、瑞泉門、九慶門を抜けて、円鑑池の前に出た。水面の中ほどに天女橋がかかり、その先に弁財天堂がある。朝鮮国王から琉球国王に贈られた方等経（大乗仏典）が収められていた。その向かい側には、かつては円覚寺があった。鎌倉にある同名の寺院を模して作られたものだったが、沖縄戦で壊滅した。弁財天堂も再建されたものである。

ここの風景は五年前と変わっていない。

次いで琉球国王の陵墓（りょうぼ）へ向かった。尚巴志によって統一された琉球王国はいったん滅ぼされ、尚円（しょうえん）によって引き継がれる。最初の王朝を第一尚氏、尚円以降を第二尚氏という。第二尚氏の尚寧以降は島津氏への隷属を強（し）いられた。石造りの巨大な陵墓は、第二尚氏の王族を埋葬したもので、玉陵（たまうどぅん）と呼ばれている。

ここも沖縄戦では被害を受け、三年がかりで修復された。埋葬され遺体は、いったん中央の石室に納められ、洗骨後に国王や王妃の骨は東の石室に、他の王族の骨は、西の石室に納められた。高さは十メートル以上、全長は数十メートルに及ぶ。首里城を模した玉陵であるが、国王を神と崇める風習は、琉球処

分以降は途絶えた。

最後の王尚泰は、東京に連行された後、一時帰郷を果たしたほかは、東京の屋敷で余生を過ごした。遺言により、遺体は沖縄に運ばれて、国王として玉陵に葬られた。

とにかく、ここは石の照り返しがひどく、石門の内側には樹木が一本もない。すでに遺跡と化しているわけだが、巨大な玉陵は沖縄が、かつては独立国であったことを物語っている。外界とは異なる聖なる場所であり、白い光に満ちあふれて、長く留まることを拒（こば）んでいるのが印象的だった。

御嶽（うたき）は神々を祀（まつ）る杜（やしろ）

那覇の沖縄国際ユースホステルは、一見するとホテルのようである。夕食後に洗濯をしてシャワーを浴びると、東京から来た青年と国際通りに食事をしに行った。初めて会った人と気軽に話せるのが、ユースホステルのいいところである。まあ、その頃は三十代半ばで、気分はまだ若かったから。

今日もよく晴れている。那覇バスターミナルへ行き、知念（ちねん）村役場までバスに乗った。向かったのは斎場御嶽（せーふぁうたき）。ここは沖縄開闢（かいびゃく）の神「あまみきょ」に創成され、琉球の古謡集『おもろそうし』には「さやはたけ」と記され、歴代の琉球国王が、知念、玉城（たまぐすく）、久高島（くだかじま）とともに、「あまみきょ」の霊地として巡礼

していた。女性の最高位にあった神官、聞得大君（きこえおおきみ）が参籠（さんろう）した聖地でもあった。

樹林の中に巨石がそびえ立ち、東南海上にある久高島を遥拝（ようはい）するための拝所（うがんじゅ）もある。そこは今も沖縄の人々の信仰を集めている所で、先ほどもお供え物を持った家族がお参りに行ったのを見た。

今、御嶽（うたき）の中を巡っている。御嶽とは、本土における山の神々への信仰とつながりがあるのか。参道の両側には表面が穴だらけの奇岩が左右にそびえ、中ほどから生えた木々の根が、岩の隙間に伸びて、表面を覆い尽くそうとしている。

一番奥は小さな洞穴の窪みで、天井からは天（あま）の逆矛（さかほこ）に似た石柱が垂れ下がっている。石壇の奥には線香が焚かれた跡があり、

右方の岩からは紙垂（しで）が下がっている。洞穴の縁より上はシダが生い茂り、昼でも薄暗くて涼しい。蟬（せみ）と小鳥、それに虫の羽音しか聞こえない。

　本土の山岳信仰を思い起こさせるが、沖縄では民間に仏教は広まらなかった。岩盤が大岩に倒れかかったような形で、三角形の洞（ほら）に見える所は、修験道（しゅげんどう）における胎内くぐりを連想させる。母なる祖霊に詣でて、失われたつながりを取り戻すのだろうか。その奥からはかつては久高島が拝めたはずだが、今は木々に視界を覆い隠されてしまっている。

　実際に、久高島に渡ってみることにした。馬天（ばてん）入口のバス停で降り、馬天港からフェリーで徳仁港（とくじんこう）に入った。港のそばには

イラブーガマ、イラブーと呼ばれるエラブウミヘビが産卵する洞窟がある。イラブーは海に住む毒蛇だが、性格は至っておとなしい。琉球の宮廷料理には、この蛇の燻製（くんせい）を入れたイラブー汁が欠かせない。

　豚肉と昆布も合わせた汁は、滋養強壮にいいらしい。イラブー自体は臭みを十分に抜いてあるので、身欠きニシンのような食感で、カシオ節に似たいい出汁が出るという。蛇みたいな下手物（げてもの）を、と思ってしまうが、中国では高級料理の食材とされ、生き血も飲んだりする。那覇の市場に出れば、針金みたいに固い、ぐるぐるに巻かれたイラブーの燻製が売られている。

　このイラブーを捕らえることを許されていたのが、久高島の祝女（ノロ）である。祝女というのは、白い着物をまとった世襲の女性

神官で、末端で地域の祭祀（さいし）を司（つかさど）っていた。琉球王国の時代、その階層の頂点に位置していたのが、聞得大君である。祝女は国王から辞令を出され、土地を与えられていた。

　これと異なるのがユタである。こちらは民間のシャーマンで、死者の霊を呼び出す口寄せを行う。恐山（おそれざん）のイタコのような存在だが、男性がなる場合もあった。琉球王国が滅亡した後も、ユタの口寄せはよく行われている。島の女たちは働き者だが、夫が泡盛飲んで三線（さんしん）弾くばかりで、ろくに働かなければ、心の救いを求めてユタの口寄せに夢中になる。

　祝女による祭祀は、琉球王国の滅亡に伴い廃（すた）れていったのだが、第二次大戦後しばらく保たれていたのが、ここ久高島である。かつては琉球国王と聞得大君が、島に渡って礼拝していた

が、後に斎場御嶽から久高島を遥拝する形に簡略化された。

　なぜそれほど久高島が重視されたか。それは琉球神話では、開闢神のあまみきょが久高島に降りてきて国作りを始めたとされるからである。本土の記紀で説かれる伊弉冉尊（いざなみのみこと）や淡路島（あわじしま）のことを頭に入れておけば、イメージがつかみやすいのではないか。

　三十歳を越えた既婚女性は、祝女になるのがしきたりだった。十二年に一回午年（うまどし）の旧暦十一月に、イザイホーと呼ばれる大祭が行われていた。祭りは御願立（ウガンダティ）と御願結（シディガフー）びを除く本祭りだけで四日間にわたる。島の女たちは白い着物に白い鉢巻き、草冠（ハブイ）をかぶって裸足（はだし）で円陣を組む。太鼓の音（ね）とともに歌われるのは神謡（ティルル）である。神の降臨と新しい祝女の承認、神をお見送りしたところで、人々が一斉に踊り出すカチャシーで締めくくられる。

ただし、過疎化と高齢化で、イザイホーは一九七八年（昭和五三）を最後に行われておらず、記録の中でしか見ることができない。

久高島に上陸した。イザイホーが行われた久高殿は御殿庭（ウドゥンミャー）と呼ばれる。琉球の赤瓦の建物は石の柱で支えられ、拝殿の中には何もない。神社の境内（けいだい）に当たるわけだが、観光客の立ち入りを拒んでいる。そのほか、外間殿（ふかまどぅん）では太陽や月・龍宮など七つの神を祀っている。クボー御嶽（うたき）は琉球開闢神話に出てくる七御嶽の一つだが、男子禁制の地である。島の南側には、五穀の壺と黄金の瓜実（うりざね）が流れ着いたとされるイシキ浜がある。そこは海の彼方の理想郷、ニライカナイの遥拝所でもある。この島全

体が神の島であり、草木や小石に至るまで、持ち出すことは禁じられている。

珊瑚を積み重ねた塀（へい）が、昔ながらの赤瓦の屋敷を取り囲んでいる。島の中を歩いているのは老人ばかりだし、建物も数十年を経（へ）たご老体。時の流れに任せて生きているといった感じだ。家並みを少し外れると、畑が少し広がり、山羊（やぎ）や肉牛が飼われているくらい。どこまでも草原と林。といっても、高い木はなく、アダンの黄色い実やハイビスカスの赤い花を除けば、緑一色の単調な色が続く。

島の中の多くは祭祀に関わる場所で、うかつに入り込んではいけない。島の中を歩き回ってたどり着いたのは、徳仁港に近いイラブーガマ。イラブーが産卵に訪れる所である。複雑に入

り組んだ岩の間を、潮が盛り上がるように寄せてくる。海底の岩にぶつかり、あたかも水が噴き出してくるみたいだ。潮の満ち干は海の呼吸だと言われる。岩の窪みに入り込んだ水は、戯れるように人には分からぬ言葉でしゃべっている。灰色の珊瑚礁とエメラルドグリーンの海、まばゆい光を映した波紋のきらめきがあるばかりで、見渡す限り人影はない。

豊見城（とみぐすく）の海軍司令部壕

翌日はやや雲が多かった。那覇バスターミナルから、豊見城（とみぐすく）城址（じょうし）公園に出た。沖縄がまだ三国に分かれていた時代、山南王の汪応祖（おうおうそ）が、漫湖（まんこ）を見下ろす地に建てた城で、琉球王国を統一した中山王の尚巴志（しょうはし）の攻撃を受けて落城した。城壁や石門も撤去されて、往時をしのぶ物はない。

僕がここを訪れたのは、山南王の遺跡を求めたからではない。この地下に沖縄戦を指揮した海軍の司令部が置かれていたからである。前回、沖縄を訪れたとき、時間の関係で見学することができなかった。次に訪れるときには、沖縄戦の記憶をとどめる壕（ごう）を、ぜひ自らの目で確かめたいと思っていたのだ。

海軍司令部壕は城趾公園の外、坂道を上った頂（いただき）にあった。コンクリートに漆喰を塗った当時のトンネルが姿を現した。その途端、そこを出入りしていた兵士たちの重苦しい気分が伝わってきて、ぞくっと背筋が寒くなった。

司令部壕は迷路のように、廊下が巡らされている。薄暗い地下の通路は、空気が淀んでいて圧迫感がある。下士官の兵員室には、漆喰が塗られていない。ここに出入りしていた軍曹（ぐんそう）らは、横になることもままならず、立ったまま仮眠を取っていたという。負傷兵が多数収容されていた医療室も、土壁があらわになったまま。軍隊は厳然（げんぜん）たる身分制度の社会であることが、改めて感じられた。突撃を命じる司令官と、前線で指揮を執（と）る下士官、そして突撃していった歩兵。

司令官室に入った。かまぼこ形の天井と壁は漆喰が塗られ、上官が執務をするにふさわしい威厳を感じさせた。壁には「醜米覆滅」と書かれている。コンクリートが剥き出しになった箇所（かしょ）は、太田實（おおたみのる）海軍少将ら六名の幹部が、沖縄県民の献身をたたえる電報を打った後、拳銃で自決した際の銃弾の痕（あと）である。

司令官が自決したということは、下士官や兵士は突撃して果て、負傷して収容されていた者も、命を絶たれたということなのだろう。つるはしや鍬（くわ）で掘ったままの刃の跡が、赤土が剥き出しになった壁に残っており、無名の兵士の汗と涙を感じさせる。

沖縄戦による死者は二十万人。そのうち、日本側は十八万八千人に及ぶ。司令官らには死の直前に精神の自由だけは残され

ていただろうが、出撃を命じられた兵士には、すでに武器らしい武器は残っておらず、無防備なまま敵の銃弾に撃たれていったのだろう。「生きて虜囚（りょしゅう）の辱（はずかし）めを受けず」という「軍人勅諭」を叩き込まれていたから、降伏して捕虜になるという選択肢は許されなかった。

　沖縄県民はアメリカ軍との地上戦に巻き込まれ、四人に一人が命を奪われた。その中には集団自決を強いられたり、日本軍に殺された者も含まれる。

「んみゃーち」の宮古島

昼頃には那覇に戻り、国際通りで玄米ご飯とゆし豆腐の定食を食べた。ゆし豆腐というのは、おぼろ豆腐に似た塩味と鰹出汁の豆腐汁である。食べ終わってから、みやげ物店などを見て回る。今回の旅では、すでに本島で四泊しているから、ちょっと愛着を感じ始めていた。今度いつ訪れるか分からないし。

　そして今、宮古島行きの飛行機に乗り込んでいる。同じ沖縄県内とはいえ、宮古島は本島とは異なる文化を育（はぐく）んできた。薩摩藩に侵略された琉球王府は、宮古・八重山に人頭税（じんとうぜい）という重税をかけた。虐（しいた）げられた側がさらに弱い者を虐げたのである。それが宮古島の島民に反骨精神を植え付けることになった。

この機体はあまり大きくない。飛行機の窓から見ると、小さな雲がたくさんあって、凪いで光を照り返す海面に影が映っている。宮古島に近づくにつれて雲が広がり、風が強くなってきた。

宮古空港に着陸した。着陸すると「んみゃーち」という言葉が目に入った。本島の「めんそーれ」みたいな感じで、「いらっしゃいませ」の意味だろうという推測はついたが、「ん」から始まる言葉があるのには驚いた。

それは宮古島の方言ばかりではない。沖縄本島などでも芋のことを「ンム」と呼ぶ。日本語の古語では「うも」であり、本土方言のオ段が沖縄方言ではウ段に変わるから、沖縄の言葉が日本語の古語を、なまった形ではあるが保存していることにな

る。

さて、空港の中はきれいだが、がらんとしていた。ユースホステルのガイドブックを見ると、徒歩で十分と書いてある。歩いていけば、そのうち着くだろうと思った。ところが、行けども行けどもさとうきび畑が続くばかり。自動販売機も、公衆電話すらない。何かがおかしい。途方に暮れていると、タクシーが通りかかったので手を挙げた。

「今月（一九九七年七月）の中旬、空港は移転されたんだよ。だから、出入り口が以前と反対になってしまったんだ」

しょっぱなから「やられた！」という感じである。宮古島の「んみゃーち」らしい。一筋縄ではいかない感じがした。ユースホステルで迎えてくれたのは、いかにも沖縄のお母さんとい

った感じのペアレントさんだった。ユースホステルではマネージャーを「ペアレント＝親」と呼び、実家に戻る心やすさで受け容れてもらえるのである。

「空港の出口が反対になって……」と話すと、ペアレントの奥さんは笑っている。むっとしそうになったが、純粋におかしいから笑っただけで、悪気があったわけではない。

そのとき、電話がかかってきた。中学を卒業した息子さんが、東京に着いたと電話してきたのだそうだ。やっぱり心細くなって、声を聞きたくなったらしい。

「親っていったい何なんだろうねえ」

自問するように問いかけてくる。その話を聞いて、お母さんだなあと感じた。何だか懐かしい、昔からのお母さんという感じがした。

「沖縄の子が東京に行くと、いろいろ分かんないことだらけなのよ。そばと聞いて、沖縄そばとおんなじだと思って、盛りそばにつゆをかけてしまったり」

次々に出てくる話を聞きながら、母親の思いというものが伝わってきて、ほのぼのとした気分になった。

翌日は雲が多かった。八時に朝食をとり、自転車を借りて平良港（ひららこう）に向かった。宮古島というのは、沖縄でも独特の言葉と文化を持つわけだが、周囲に多くの小島を従えて、宮古諸島を形作っている。

そのうちの一つ、伊良部島（いらぶじま）に渡ることにした。自転車を引い

てフェリーに乗り込む。港から十分で着いてしまうとのこと。二〇一五年（平成二七）には伊良部大橋が開通し、宮古島とつながったが、当時はまだ工事も始まっていなかった。伊良部島は下地島（しもじじま）とも、すでに橋でつながっていた。二つの島は数十万年前の、新生代第四期の琉球石灰岩でできている。伊良部島にある通り池は、石灰岩にできた鍾乳洞が地殻変動で陥没し、海水の浸食によって生まれたものだという。

　実際に伊良部島に渡り、通り池の方に向かった。海岸線の岩場から草原にかけて、二つの池が見える。外側の池は直径七五メートル、深さは四五メートル。内側の池は直径五五メートル、深さ二五メートル。二つの池はアーチ状の橋の下でつながり、外側の池はさらに海につながっている。なるほど、青く澄んで

いて、外洋のような深い色をしている。池の底近くまで光が射し込むらしい。

　水中には石灰石の柱が垂れ下がり、鍾乳洞だった名残をとどめているという。ただ、表面の白さは失われており、黒みかがった周囲の岩と同じ色になっているとのこと。水面の浅い部分は真水で、途中から海水に変わるのだが、水面に近い部分ほど、石灰分が溶け出してえぐられている。そんなことを考えずに眺めていると、異界に引き込まれるような力を感じ、池の縁で足がすくむのを感じた。

　伊良部島と下地島の間は、川ほどの幅の海峡しかなく、ほとんど地続きといってもいい。小さな橋を自転車で渡って、下地

島に入ってきた。海岸線を進んでいくと、異様な数の大岩が転がっている。これは一七七一年の明和の大津波が運んできたものらしい。死者一万二千人を出した津波は、八重山地震が引き起こしたものである。日本の元号では明和八年であるが、当時の琉球では清の元号が使われていたから、乾隆(けんりゅう)三六年の出来事と言った方がいい。

　これを見ていて、龍安寺(りょうあんじ)の石庭を思い浮かべてしまった。海中より現れ出たのは、精神という海から生まれた意識なのではないか。一人の人間の中には、何とさまざまな相容れない思いが共存していることだろう。それよりも不思議なのは、一人の人間は一つ一つの思いにとらわれているのに、精神は岩の一つ一つを出現させた海そのものであるということだ。

　現実の話に戻そう。津波石が打ち寄せられたことで、島民は魚垣(ながき)という漁を編み出した。これは海から磯の方向へ、放射状に石を積んだもので、魚の逃げ口は一箇所しかない。潮が満ちたときに入り込んだ魚は、潮が引くと取り残されてしまう。島民は手づかみで魚が捕らえられるのである。現に魚垣の内側では、逃げ場を失った魚が、ぴちぴち跳ねる音がするが、それを捕らえる者の姿はない。

　下地島にはもう一つ見るべきものがある。それはジェット機が離着陸できる滑走路を持つ空港である。へえ、そんなの離島じゃ珍しくないと思っているあなた、滑走路のすぐ脇まで入っていき、巨体を間近から観察できる空港があるのだ。

　しかも、奇妙なことに気づくはずだ。離陸したジェット機は

旋回しながら、同じ滑走路に向かって着陸態勢に入ってくる。轟音を立てながら、まさに真上を白い機体をさらしながら下りてくる。こちらに突っ込んで来るほどの近さで。写真を撮ろうとしたのだが、音と振動がすさまじく、シャッターを切り損ねてしまった。

　それだけじゃない。ジェット機が離着陸するなら、多数の乗客が移動するはずなのに、周囲には人影も乏しく、管制塔の白い壁が夏の光線に映えるばかり。あまりに閑散としている。

　実は、ここ下地島空港は、パイロット養成の訓練用空港なので、十分おきに離着陸が繰り返される。滑走路は海中に向かって伸び、誘導灯は沖合まで続いている。なるほど、パイロットになるのに費用がかさむわけだ。

　伊良部島の佐良浜港は、宮古島の平良港にフェリーで渡る港だった。当時はまだ伊良部大橋がなかったから、帰りもフェリーで帰るしかなかった。港に向かって自転車をこいでいると、ユースホステルで同室だった青年がいた。そこで、午後は一緒に行動することにした。

　まだ肝心の宮古島の中を見ていない。まず、宮古島の支配者だった仲宗根豊見親の墓に詣でることにした。十五世紀から十六世紀初頭の豪族で、琉球王府の命を受け、八重山や与那国の征伐を先導したとされる。

　墓は宮古島の巨石墓「みゃーか」と、本島の墓の様式を折衷したもの。仕切りの中央は幅が一メートル強、高さ二メートル

弱。出入り口にはかつて観音開（かんのんびら）きの戸がついていた。階段状になった前面と、天井の部分がアーチ状になっている点に特色がある。墓の内部は手前に棺と副葬品、奥には洗骨後の骨が納められていた。左方の階段はかつては地下に通じていたらしく、半ば埋もれて窪みとなっている。

　仲宗根豊見親の墓の奥に、アトンマ墓というのがある。これはアトンマ（後妻）を本妻とともに埋葬できないので、まとめて葬るために造られた墓である。手前にアーチ型の門があり、数段の階段を登って中に入ると、ふさがれた墓の入口がある。

　征伐して恭順（きょうじゅん）させたことで、琉球王国は奄美群島から宮古、八重山、与那国に至るまでの最大版図を持つことになった。十七世紀初頭に薩摩藩に侵攻され、奄美群島は奪われ、実質的に

幕藩体制に組み入れられた。その一方で、中国の皇帝から冊封を受けた琉球国王が統治するという体制は続く。薩摩藩からの圧力に屈した琉球王府は、先島と呼ばれる宮古、八重山、与那国に対して、差別的な重税である人頭税を課した。

　これは田畑を持つか否（いな）かにかかわらず、一定の年齢に達した住民すべてに納税を義務づけたもので、病弱な者や老人は人減らしの対象とされるようになった。妊婦（にんぷ）を無理に堕胎（だたい）させるなど、悲惨な結果も招いたのである。

　人頭税石は僕の背丈で口の辺りの高さがあった。一四三センチである。この背丈に達した段階で、すべての住民に納税が義務づけられたらしい。柳田国男は『海南小記』の中で、この石について「ぶばかり石（賦測石）と称し、この石で背丈を測っ

て石の高さに達すると税を賦課された」と述べている。ただし、これには異説があり、人頭税は十五歳から五十歳までの住民に課されたという。

人頭税は琉球処分で沖縄県が成立したのちも続く。これは併合に反発した士族を懐柔（かいじゅう）するためで、日露戦争の前年、一九〇三年（明治三六）にようやく廃止された。

ユースホステルで同室の青年と別れ、僕は一人で池間島（いけまじま）に向かっていた。宮古島北部に浮かぶ島だが、海中道路の池間大橋でつながれ、宮古島とは地続きになっている。朝からずっと自転車に乗っているので、ペダルを漕ぐ足も疲れてきた。途中で砂山ビーチに出てしまい、県道二三〇号線に入るのに苦労した。

すでに午後三時を過ぎていた。

狩俣（かりまた）地区を過ぎた辺りで、西平安名（へんな）崎の風力発電システムが見えてきた。現在では珍しくないが、二十世紀末の頃には、林立する白い鉄塔で巨大な風車が回る姿は、テレビでしかお目にかかれなかった。現代アートでも見せられたような壮観だった。その先には池間大橋がエメラルドグリーンの海中に伸びている。しかし、そこまでたどり着くまで何分かかるだろう。

もうすぐ四時半になる。ようやく海中道路に差しかかった。一直線に彼方まで伸びている。橋の上から覗き込むと、海はところどころ、背が届きそうなほど浅い。珊瑚礁が広がっているからだ。池間島という名の由来は、島の中央に大きな池があることによる。もともとは二つの島の間に海峡が走っていたのだ

が、砂が堆積して一つの島になった。池はかつての入り江の名残なのだろう。周囲に湿原が広がっているのだが、海鳥の姿は認められない。

池間島を走っていて目につくのは、この島が蟹に優しいということだ。「ドライバーへ―カニに注意」「カニさんへ―Car（カー）に注意」とか。中には「カニさんどちらへ?」「広い海の産婦人科よ」なんて看板もある。島の中央にある湿地と海を行き来するには、どうしても車道を横断しなければならないからだ。カニの大移動は、五月から十月の満月の夜に行われるという。

半周ぐらいしたところで、また池間大橋を渡って宮古島に戻った。帰路はだらだらの上り坂が続いたから、行きよりもきつかった。スーパーに入って「ミキ」という飲み物を買った。こ

れは米と餅米、生姜（しょうが）を入れて発酵させた甘酒のようなもので、疲れた体の栄養源には最適だ。すぐに体力がよみがえって、平良港への道を急いだ。

漲水御嶽（はりみずうたき）は宮古島の方言では「ぴゃるみずうたき」と呼ばれている。島の創世神話も伝えられていて、天帝が天（あま）の岩戸（いわと）の先端をへし折って、海中に投げ込んだことで宮古島が生まれたと言われる。一五〇〇年豪族の仲宗根豊見親が琉球王府の軍隊を先導して、八重山の遠弥計赤蜂（おやけあかはち）を征討する際にも、この御嶽で神霊の加護と戦勝を祈願したとされる。社（やしろ）は琉球赤瓦の屋根と白壁のコントラストで美しい。その前では信心深いおばあさんがお祈りしていた。座り込んで手を合わせ、何か唱えているところを見ると、ユタなのかもしれなかった。

夜中は雨の降りが激しかった。朝になって上がった。同室の二人は九時半の船で石垣島へ、船を乗り継いで西表島に渡るとのこと。うらやましかった。五年前に訪れたわけだが、西表島は沖縄の中でも、まだ手つかずの自然が残っている。マングローブが広がる汽水の川は、アマゾンを思わせるほど野性味あふれていた。

「あの光景を見に行くんだな」

二人が出て行ってしまうと、案の定寂しくなった。ユースホステルの中ではヤモリが「キョンキョンキョンキョン」と鳴いている。本土ではお目にかかったことがない。石垣島にはいたけれども。

九時半過ぎに自転車に乗って出発。下地（しもじ）町役場（現在の宮古島市役所下地庁舎）の前を通って、来間（くりま）大橋を渡っていった。昨日の池間大橋からの眺めの方が良かったが、来間島の展望台からの風景は圧巻だった。すぐ間近に橋の全貌が見られ、一直線に海上を伸びる道路も、エメラルド・グリーンの海に映えていた。それを眺めながら弁当を開いた。背後にはさとうきび畑が広がっている。

宮古島は池間島と来間島、そして現在では伊良部島とも橋で結ばれている。宮古島が中心になって、周囲の小島を従えた共和国みたいに見える。琉球王国に呑み込まれる以前のように。

宮古島の南部を走っていると、突然、ディズニーランドみた

いな建物が出現した。青い屋根と白壁のヨーロッパの城に仰天した。辺りには人っ子一人いないのにと思った。「うえのドイツ文化村」という。明治の初めにこの沖でドイツ商船が難破したのを、住民が救助に当たったことで、ドイツとの友好関係が生まれた。それを記念して、旧上野村（現、宮古島市）に一九九六年（平成八）に建てられたものだ。記念館には難破の様子を物語るパネルや、ベルリンの街を分断していた壁が展示されている。

その前を通過して向かったのは、イムギャーマリンガーデンだった。珊瑚礁が沖まで続く絶景で、浅瀬でシュノーケリングするのには最適だからだ。地球が丸いのが感じられるほど、水平線を遮（さえぎ）るものは何もない。宮古島に来てまだ一度も泳いで

いなかったし。水着に着替えると、自転車とリュックサックを残して海に入る。そこには家族連れがいたけれども、海の家なんかありはしない。岸から十メートルぐらいで背が立たなくなる。

ふと気づくと、僕一人きりになっていた。生きた珊瑚の周りには、色とりどりの熱帯魚がいた。西表島の星砂の浜よりも魚の数ではまさっていた。魚を追っているうちに時を忘れ、孤独であるのを感じなくなる。

岸に上がると小雨がぱらついてきた。リュックサックを岩蔭に隠し、沖のリーフにぶち当たる波の高さ、潮騒のすさまじさに目を見張った。砕ける白波は人の背丈ほどもある。そのために、リーフの内側までさざ波が伝わってくる。

空はどんより曇っている。僕はかつて見た海のことを思い出した。あれは下北半島の海だった。真夏だというのに、寒くてじっとしてることもできなかったっけ。今日は少し暑さが和（やわ）らいだ程度なのだが、ひどく人が恋しくなる。こういう所に来ると、自分が本当は人間が好きなのだということがよく分かる。

それに、今晩はユースホステルで、ただ一人で眠ることになるらしい。二時間近くは泳いだろうか。少し疲れたので、三時前には海から上がり、着替えて出発することにした。シュノーケルで魚を見ることもしばらくないだろう。海に向かって、楽しかったよ、有難うと言った。

周囲には観光客も、島の人の姿もない。日焼けの害を知ってるから、シャツを着て泳いだり、早朝、または日暮前しか泳が

ないらしいが。帰りはスムーズに平良港に戻れた。おみやげを何にするか、市場の中を歩き回った。ユースホステルに着いたら、午後七時を過ぎていた。夕食はマグロの刺身、グルクンの天ぷら、宮古そば、モズクだった。予想通り、部屋の中は僕一人だった。

人恋しいので、テレビで「男はつらいよ　夜霧にむせぶ寅次郎」というのを見てしまった。外はまた雨が降ってきたようだ。明日の今頃は、うちに戻っているんだろうな。

午前七時前に起床。さわやかな朝だった。本土で言えば、早朝六時ぐらいの日の高さなのだから。宮古・八重山は経度の上では、台湾とほとんど変わらない。小鳥のさえずりが聞こえる。

窓をいっぱいに開けると、涼しい風が入ってきた。三日前に着いて以来、この部屋にも世話になったわけだ。

朝食を八時にとり、大きな荷物は預けて、自転車を借りて走ることにした。宮古島の南東にある東平安名(へんな)崎は、地図を見る限りでは二十キロ先にあった。いざ、出発！　夏の日射しを浴びて進むにつれ、昨夜のメランコリックな思いは吹き飛んでいく。晴れ上がった大空の下、車のほとんど通らぬ道をひたすら走る。気分は爽快(そうかい)だけれども、行けども行けども見えてこない。地図には細かなカーブは描かれていないから、見かけよりはずっと遠いのだ。

岬の手前にはマムヤの墓というのがあった。これは平安名村の絶世の美女マムヤが、恋に破れて断崖から投身したという伝

説に基づく。先端は歩道が灯台に向かって、くねくねと延びている。視界を遮る樹木もなく、緑の草原の間に、ヒルガオやアザミ、カタバミなどが花園をなしている。四月頃には真っ白なテッポウユリが見られるという。

東平安名崎は東京まで一八四三キロ、ソウルまで一四三四キロ、台北まで四〇三キロ、那覇まで二七九キロ、石垣までも一四〇キロある。ここは東シナ海と太平洋の流れがぶつかり合う所。沖は凪いでいるのに、打ち上がる波しぶきがすさまじい。一つ一つの波が芸術的で個性を持っている。

風の向きと強さ、いくつの波を呑み込んだかによって、規模、盛り上がり方、砕ける際に噴き上げる飛沫(ひまつ)の散り方も変わってくる。沸き立つ泡の中には海水と風、削り取られた岩の破片も

混じっている。ここは海と陸地がせめぎ合う所。目には見えない速さで、海は確実に岬を削り取っていく。

灯台の上に登ってみた。南西側の太平洋から波が打ち寄せてくる。岬の北側は比較的穏やかで、珊瑚礁の手前で波は砕けて、その上を白い泡が滑っていく。ところどころに大岩が小島のように点在している。

帰路はさとうきび畑の間や、珊瑚礁が見える高台の道を走った。熱帯植物園で宮古馬の写真を撮ったりした。本土の在来種と同じで、小柄で素朴な馬である。平良港に入るところで、ユースホステルのペアレントのおばさんが、車の中から手を振ってくれた。

五時に戻ると伝えておいたのに、もう五時半になっていた。「すぐに戻ります」と言って別れた。みやげ物に古酒(クース)を買い足した。ユースホステルに着くと、一階には誰もいなかった。先ほど手を振ってくれたのは、別れの挨拶だったのだろうか。自転車の鍵を返して、電話でタクシーを呼んだ。玄関で待っていると、おばさんが帰ってきた。

お礼を言った後、東平安名崎であったことを話すと、おばさんはいろいろなことを教えてくれた。台風の時など、岬の南側のしぶきが北側の崖下まで飛んでいくのだそうだ。海水も飛んでくるため、宮古島では自動車の持ちが悪く、外側とエンジンから錆(さ)びていくということだった。

おばさんの息子さんは、本土の高校の野球部に入っているそ

うだ。練習がきついらしいこと、サボりたくて帰郷したかどうかは分からないが、僕がユースホステルを訪れた日に那覇を発ち、羽田行きの飛行機に乗ったとのこと。息子を思う情が伝わってきた。

　ちなみに、宮古島ユースホステルは、二〇一七年（平成二九）四月に、「宿　タテッチャー」と名称が変更されている。年齢層にこだわらないゲストハウスとなっている。今の若者はユースホステルには泊まらないいんだろう。見知らぬ人と交流するのが好きじゃないのか。それ以前に、アルバイトも学費を稼（かせ）ぐためで、夏休みに旅に出る余裕もないのか。

　タクシーに乗り込んだ。いよいよ僕も、本土に戻る時が訪れ

た。宮古空港を離陸すると、しばらく西平安名崎と池間島、それに池間大橋を眺めていた。宮古島に着いた翌日の午後、はるか下に見える橋を渡っていたことを思い出した。七時頃まではまだ日があり、凪いだ海を黄金色に染めていた。

　午後七時半過ぎ、那覇上空を通過したが、雲に覆われて何も見えなかった。ただ、八時近くまで西空には緑色の線のような光が残っていた。すでに紀伊半島上空まで達し、一時間ほどで羽田に着陸する。今回の旅もまもなく終わる。宮古島の海は美しかったが、陸地はさとうきび畑と林ばかりだった。

北谷はアメリカンビレッジ

最後に沖縄を訪れたのは、父が死んだ年で自分はまだ三十四歳だった。それから四半世紀以上の時が流れた。

　もう初老の年になったが、気分だけは若い頃と変わらない。友人に誘われて、五月の中旬に沖縄本島に行くことになった。例年なら沖縄は梅雨入りしているはずだが、前線は本土に行ってしまい、真夏が訪れたようになっているらしい。

　今回も羽田空港から出発した。窓側に座れたのだが、翼の横なので、あまり景色はよくない。梅雨前線の雲を避けるため、通常よりも本州沿岸を飛ぶことになった。富士山が右方の下に見えてきた。あれを見ると、日本に帰ってきたという気がする

んだと、友人に話した。

　伊豆半島を横切り、遠州灘の上を飛び、紀伊半島をかすめていく。北海道ならもうすぐ着く時間だが、航路はまだ半分も来ていない。高知沖を通り、九州の脇を進むと、屋久島、口永良部島が見えてきた。

　それでも沖縄本島までは一時間弱かかる。やがて正面に那覇空港の滑走路が見えてきた。十分ほどの遅れで午後一時前に着陸した。すでにお腹が空いていたので、空港内の食堂で、沖縄そばとクワジューシーのセットを頼んだ。コーレーグスを入れすぎて、激辛になってしまったが。

　食事の後、空港から直接、北谷（ちゃたん）の美浜（みはま）アメリカンビレッジ行

きのバスに乗り込んだ。那覇の町をのろのろ進んでいたときだ。旭町の信号を目にして、見覚えがある気がした。あの頃はまだ自分は若かった。当時の記憶が断片的によみがえる。追憶にふける間もなく居眠りしてしまい、終点の少し手前で目が覚めた。

ザ・ビーチタワー沖縄にチェックインした。ロビーにはフクロウが枝につながれ、小屋の中で子猿と亀が飼われていた。建物はタワーマンション風で、中央が吹き抜けになっている。部屋からは人工のビーチが見えた。夕食まで時間があるので、ホテルの周辺を散歩することにした。

本土なら八月のような猛暑で、強烈な光に遠くが白く輝き、目を細めなければ、砂浜を見られない。しかも湿気がすさまじく、エアコンの部屋から出てくると、レンズが曇ってしまうほ

どだ。

ホテル前の砂浜は、あまり水がきれいではない。アメリカンビレッジに向かった。原色の壁に装飾的な窓。看板はすべて英語。確かにアメリカの街の中を歩いているようだ。露出的というか開放的というか、とにかく何でもど派手なのだ。これもアメリカの軍事基地ができて、米兵相手のビジネスが誕生したこと、土地を奪われた沖縄の住民が、南米に移住したりしたことで、多文化が共生する街が生まれたのだ。

コンビニで買った黒糖のサーターアンダギーを、ホテルの部屋で食べた。おいしかったのだが、甘さが強烈だった。シークワーサー入りのジュースは、とても爽やかなのだが。ちなみに、ヒラミレモンという和名がついており、レモンと温州（うんしゅう）みかん

を掛け合わせたような味がする。
　別棟のプールに入った。買ってきた海水パンツをはいた。プールは子供用と幼児用で、深い方でも1メートル半しかない。曲線なのでまっすぐ泳ぎにくい。背泳ぎをしたら、心臓がバクバクした。十年ぐらい泳いでいないからか。友人に泳いでと言ったら、足をつきながら泳いでいるふりをした。
　温水プールに移動したら、ほとんど温泉と同じ温かさで、泳ぐ気にはならない。隣接する浴場の方に移動した。
　内湯は沸かし湯だが、露天風呂の方は温泉だった。弱アルカリ性なのだが、硫化水素の臭いがして、メタケイ酸を多量に含む。そのおかげで、肌がすべすべになる美人の湯だった。
　湯上がりにヨモギ入りの玄米ドリンクを買った。これはすぐ

にエネルギーになる。以前飲んだのは、ヨモギが入っていないものだった。ヨモギ入りは香りがいい。
　部屋に戻って休憩した後、アメリカンビレッジに夕食を食べに行った。ライトアップされると、壁の原色は目立たなくなる代わりに、電光掲示板のど派手な光が目につく。私を見てと言っているようだ。ステーキの店や沖縄料理、焼き肉屋やバーなどが多かった。友人がスマホでナビをしてくれた。
　牛骨琉球ラーメン MARUMARO に入った。そこは昼間、アメリカンビレッジを歩いているとき見つけた店だった。牛骨琉球ラーメンの味噌味を食べた。濃厚な牛の旨みに、玉ねぎの甘さとニンニクのパンチが効いている。牛飯ガーリックはビリ辛

で食欲を誘う。

　とてもおいしかったし、量が多くて満腹感があった。部屋に戻ると、友人はソファーで眠ってしまった。もう一度温泉に入りたかったのだが、入場時間が過ぎていった。部屋のシャワーを浴びることも考えたが、だるいので体がベトベトのまま寝てしまった。

真栄田岬の幻影

朝七時半に起きた。食堂に行ったら込んでいて、屋外のテーブルで食べることになった。海が見えるのはいいが、蒸し暑いので、明日は室内で食べたいものだ。

　ホテルは夕食がない代わりに、朝食が夕食のように豪勢だった。沖縄そばやクーブイリチーなどの沖縄料理、刺身、ステーキ、カツ丼、カレー、マンゴーなどのフルーツ、ヨーグルト、ケーキだけではない。生ビールまで飲み放題だった。

　部屋に戻ってちょっと休んだ。連泊するので、荷物は置きっぱなしでいい。ホテル近くの美浜アメリカンビレッジから、名護行きのバスに乗った。

久良波（くらは）のバス停で降りたとき、見覚えがあると思った。沖縄には二十九歳の時と、三十四歳の時に来たが、ともに真栄田岬（まえだみさき）のユースホステルに泊まった。二回目の時は、真栄田岬ダイバーズハウスとなっており、ダイビングをする人が多く泊まっていた。

ホステルは、裏手が崖になっており、真っ青な東シナ海が広がっていた。食堂に行くと、ダイビング用のタンクやマウスピース、ウェットスーツが並べられていた。参加する人が集まってきた。

「きっと自分でもしたくなるはずですよ」

時間が来ると、若者たちは次々にウェットスーツに着替え、タンクやマウスピースなどを下げて、建物の裏手にある階段を

下りていった。人々を見送ってしまうと、岬の端からまっ青な海を眺めていたものだ。

それから四半世紀以上経った。ユースホステルがダイバーズハウスになったのは知っていたが、建物自体が跡形もなくなっていた。ダイビングをする人たちの群がる待合所と、展望台の間にある芝生の辺りに、懐かしい建物があったようだ。裏手に続く細道も見覚えがある。青春の思い出の場所が、また一つ消えてしまっていた。

今の若者は貧しくなって、学費稼ぎのアルバイトに追われ、遠くに旅行などできなくなっている。そのため、僕が泊まったユースホステルの多くも消えて、若者同士の交流の場も失われてしまったのだ。懐かしむというより、喪失感の方が大きかっ

た。
　真栄田岬から階段が下に続いている。今回も見に行くことにした。ダイビングやシュノーケルをする人たちが、海から上がってきたり、海上から頭を出したりしていた。
「水がきれいだね」と友人が言った。
　本当は自分もシュノーケルをしたいのだが、若い頃と違ってちょっと泳ぐだけで心臓がどきどきしてしまう。昨日、十年ぶりに泳いでそれを実感した。岬はすぐに深くなるので、水が青く澄んでいる。魚も多く見られるのだろう。餌付けなどしないように、注意書きが看板に記されていた。
　今日のもう一つの目的地は残波（ざんぱ）岬（みさき）だ。真栄田の停留所から

バスに乗り、残波入口で降りた。そこから残波岬まで延々と炎天下を歩いていく。
　残波ビーチは砂浜で、風も収まっていた。沖に珊瑚礁があり、内側はエメラルドグリーンで波はない。珊瑚礁のあたりで波が砕けているのが見える。海水浴場となっているのは、珊瑚礁の内側を、さらに青い浮きで区切ったロープの中側である。
　砂浜を歩いていき、さざ波に触れたがぬるい感じ。水はきれいだから、体を浮かべて浮いていたいと思った。
「ここまで来ないと水がきれいじゃないんだね」と友人が言った。
　ただ、砂浜で遊ぶことを考えたら、波があった方がいい。沖縄の海は、珊瑚礁でシュノーケルをするのがいい。

残波岬はまだまだ先らしい。それにしても、五月中旬だというのに、沖縄は真夏の暑さである。一休みしたいと思っていたら、こんなところに首里城？　ではなかった。燃えてしまった首里城正殿を模した「お菓子御殿」だった。そこでソフトクリームを食べて、涼んでから先に進むことにした。紅芋タルトの工場と土産物屋、喫茶店を兼ねた施設だった。

右方に白い灯台が見えるのだが、なかなか近づいてこない。時折、水分補給して汗をぬぐいながら進んだ。

灯台は上にのぼれるようだ。有料だろうと思った。五百円とか書いてあったら、「上ってきていいよ。下で待っているから」と友人なら言いかねない。三百円だったので、一緒に上ることにした。

階段は傾斜が急である。もう若くないから、手すりにつかまって上っていく。踊り場で方向転換すると、まだ階段は続いている。そろそろかと思ったが、まだ続いている。ようやく、上から光が差してきたが、最後の階段は特に急でほとんど梯子（はしご）である。

しかし、上りきった甲斐があった。残波岬の全体、遠い海の彼方まで見える。吹き渡ってくる風が涼しい。三十メートル弱の高さだが、下のうだるような暑さとは別世界だ。気持ちよさを感じると、心にも余裕が感じられる。真栄田岬と似たようなものかと思っていたが、ここには過去につながる感傷などなかった。彼方にお菓子御殿の赤い屋根が見える。

灯台を下りた後、岬の岩場を上っていく。ここが海底だった

のは、岩場の珊瑚が海底にある頃の形のままで、岩と化していることで分かる。地質学の尺度からすれば、つい最近まで海底だったのだろう。靴を履いていても、靴底に珊瑚の先端が突き刺さりそうだ。

　初めて珊瑚礁を歩いたとき、サンダルで踏み込んだために、足に切り傷を負ったのを思い出した。死んだ珊瑚は割れた瀬戸物のように、先端が鋭いのだ。それが今でも感じられる。

　岬の崖から海を眺めている。ここも海底が見えるのは数十センチほどで、すぐに海は深く続いている。突き出した岩場に、青年二人の姿が見えた。一人はカメラを構え、もう一人は上半身裸の水着姿だ。どうやら、海に飛び込むところを、動画に撮

影してYouTubeにでも投稿しようと考えているのだろう。

「おお、すげえなあ、高いなあ」

　水着の青年は下の崖の端に座りこんで、躊躇（ちゅうちょ）しているようだ。何度も体を前にさらしながら、やはりためらってしまう。無理なことしなければいいのにと思っていると、ついに青年は飛び込んだ。すぐさま浮かび上がり、平泳ぎで頭を出しながら「気持ちいい！」と叫んだ。泳ぎは得意なようだ。

「崖が続いているから、上にあがれるのかな」と僕の友人が言った。

　青年は岩陰に隠れたが、やがて下からあがってくるのが見えた。若いから無茶をしたりするが、無茶だからこそ自分ができないと思ったことを、やってのけたりするんだな。下手な賢さ

がつくと、もう危険なことはできない。
さて、そろそろ戻ろうということになった。酷暑が続く中を歩いていく。沖縄は本土に時間を合わされているから、午後五時過ぎでも、まだまだ光が強い。お菓子御殿で一休みすることにした。紅芋とチョコレートのロールケーキに、グァバジュースを注文した。
その後、友人は近道を進んでいった。農道みたいに細く、舗装すらされていない。正面に石造りの何かが見えてきた。遺跡か何かなのかと、彼は思ったようだが。
「あれは沖縄のお墓だよ。本土の物の数倍はあるだろう。中国と同じスタイルで、遺体をあの中に入れて、数年後、骨だけになったら、それを洗って壺に収めるのが、先祖供養になると考

えていたんだよ」と僕は説明した。
新しい道はまだ土が露出している。窪んだところに水がたまり、池のようになっている。正面に車道が見えてきた。それを右に曲がっていくと、読谷（よみたん）のバスターミナルに至るようだ。見るとすでに、バスが到着しているではないか、手を振って走っていくと、すぐに発車した。
「いつもぎりぎりだね」と笑った。

美浜アメリカンビレッジに戻ってきた。どこで夕食を食べるか相談した。僕は昨夜の牛骨の琉球ラーメンを食べたかったのだが、友人はあれは量が多すぎて、夜十時からの無料の夜鳴き

そばが食べられないと言った。

結局、アメリカンビレッジをさまよい、激安の居酒屋を見つけた。そこで、僕は豆腐チャンプルーとタコライス、生ビールを注文した。友人は麩（ふ）チャンプルーを注文した。チャンプルーは野菜の量が多く、スパムも入っていた。タコライスを友人に分けてあげた。

ホテルの部屋に戻ると、一休みしてから、温泉に入ることにした。疲れているし、プールはすでに終わっていたから。美肌の湯と言われるだけに、シャワーで洗い流してもぬるぬるし、肌もすべすべになった。

「沖縄にこんな温泉があるとは思わなかった」と友人は感嘆していた。部屋に戻ってからは、ベッドでごろりと寝っ転がった。

暑さのためにひどく消耗していた。

夜十時過ぎに食堂に行くと、すでに五十人以上の人が、夜鳴きそばを食べていた。醤油の素ラーメンに、ねぎとメンマを好きなだけ入れた。コショウにコーレーグースを入れるところが、沖縄風ではあるが。さっぱりした鶏ガラの醤油ラーメンだ。お腹はあまりすいていなかったのだが、スープまで完食してしまった。

玉泉洞とガラス工房

今朝は七時半前に目が覚めたので、少し早く食堂に行った。昨日の朝は屋外で暑かったので。食事はバイキング形式で、昨日とメニューは大して変わらない。小籠包（しょうろんぽう）が焼売（しゅーまい）になったりしていたが。

無料のビールは控えることにした。刺身類もやめた。どうしても食べたい物だけにしよう。ラフテーのカレーはおいしかった。沖縄そばとゴーヤチャンプルー、サーターアンダギーは食べた。アイスは昨日食べなかった黒糖と紅芋、それに昨日おいしかったイチゴを食べた。特に黒糖は香ばしい香りがした。

朝食の後、ホテルがくれたクーポン券を使って、売店で雪塩

のチンスコーと紅芋タルトを買った。部屋に戻って少し休んでから、もう一度温泉に入った。温度が四十一度なので、長くは入っていられない。

友人がおきなわワールドとガラス工房のツアーがあるが、行かないかと誘ってきた。僕は那覇の街を歩き回りたかったから、ちょっと迷った。ただ、昨夜の暑さを考えると、おきなわワールドには玉泉洞（ぎょくせんどう）があり、ひんやりした地下世界を探検できるのも魅力だ。午後一時二十分までに、県庁前に集合すればいい。それまで一時間ほど、那覇の国際通りを歩き回れるというので、ツアーに参加することに同意した。

午前十一時にチェックアウトした。美浜アメリカンビレッジから那覇行きのバスに乗る。県庁前で下車すると、沖縄都市モ

ノレール、通称結(ゆい)レールが見えた。那覇見物をするなら、終点まで乗っただろうが。首里城は炎上し、再建して完成するのは来年。わざわざ見に行くまでもない。

国際通りを歩いた。前回来たのは、那覇空港へ行くまでの時間つぶしだったようだ。あの時のわくわくした感じを懐かしく思う。愛媛県八幡浜(やわたはま)市の中学生が、修学旅行に来ていた。京都や奈良が定番だと思っていたが。

おみやげを買うことにした。空港よりも安い気がして。シークヮーサーやパイン味のチンスコー、豆腐ようを買った。路地の市場に入ると、さらに値段が安かった。ナントゥもちが懐かしくて買った。これは餅米に黒糖、味噌、生姜、コショウなどを合わせて練り、落花生を花の形に載せた物。ナントゥとは年

頭のことで、正月に食べる餅のことである。中国のニェンガオに似ている。

午後一時二十分に県庁前に着いた。僕と友人が乗りこむと出発となった。ツアーには五十人乗れる大型バスが来たが、お客は七名しかいなかった。

那覇市内の漫湖(まんこ)には、マングローブが群生しているが、これは一本一本高校生の手で植えられた物が、数十年経って群落となったそうだ。種の一部は向かい側に流れ着いて、干潟に根を下ろしはじめていた。

バスは沖縄本島南部に向かっている。目指すおきなわワールドは、南城(なんじょう)市玉城(たまぐすく)にある。入口に首里城の建物のような、朱

の木壁に漆喰（しっくい）で固められた赤瓦（あかがわら）の門が見えてきた。ここでの自由時間は約二時間で、玉泉洞は三十分ぐらいで回ればいいと言われた。

玉泉洞の中に入った。まずは階段をずっと下りていく。下りきってからは、比較的平らな道を歩いていく。上下の移動が多かった岩手の龍泉洞（りゅうせんどう）とは対照的である。正面に槍天井が見えてきた。確かに垂れ下がった先端は鋭く、こんな物で突かれたら突き刺さりそうである。宇都宮城の吊り天井を連想した。ありのまま撮影するなら、フラッシュを使えばいいのだが、うす暗い中で浮かび上がる鍾乳石を撮影したいなら、フラッシュなしの方が神秘的である。

龍泉洞や山口の秋芳洞（しゅうほうどう）などは、派手なライトアップで、地

下の異世界の雰囲気を高めているのだが、玉泉洞は自然な光の中で、鍾乳洞の中を探索させようとしているようだ。

その予想は、青の泉に至ると見事に裏切られた。地下を流れる小川の水底（みなそこ）が、水の中から青でライトアップされている。地底の水がなす息の長い、時を超えた営みが感じられた。これを見ていると、マックス・コルバッチョのDeep Timeを聞きながら、水滴のしたたる青白い地下世界をイメージしているときのことを思い出した。

玉泉洞のもう一つの特徴は、仏教色が乏しいということである。沖縄は琉球国王や士族を除けば、仏教はほとんど浸透しなかった。地下水に溶けた成分が、地底にヒト型の柱を林立させても、それを仏像になぞらえたりしない。天井から吊り下がる

鍾乳石の槍から、地獄を連想したりしない。
奥多摩の日原(にっぱら)鍾乳洞などは、修験者が修行に使っていたため、松明の煤(すす)で天井が黒ずんでいるところもあった。洞窟全体が母の子宮になぞらえられ、そこをくぐることで死と再生を体験するという意味が込められていた。そうした宗教色が玉泉洞には感じられないのである。詳しい調査が行われたのが、戦後ということもあるが。
水がしたたり落ちてきて、足もとが非常に滑りやすくなっていた。現に転倒して腰を打ち「もうだめだ。明日は立てないだろう」とぼやく若者もいた。それはともかく、青の泉のあたりは魅力的で、心の赴(おもむ)くままに写真を撮っていた。そのため、地上に上がってきたときには、すでに一時間以上過ぎていた。

あとは、おきなわワールドの園内を、急ぎ足で過ぎていった。熱帯フルーツ園の類(たぐ)いは、今まで何回も見てきている。琉球ガラス工房は、別の場所を訪れることになっているので省略した。
紅型(びんがた)や藍染(あいぞめ)の工房では、体験をしている人がいた。上江洲(うえず)家は琉球の士族の家を移築した物。琉球式の屋敷だが、屋敷の中がとにかく明るい。壁が少なく解放的で、畳敷きで掛け軸などがある点は、日本の武家屋敷と共通している。
ただ、日本の屋敷にこもる暗さや匂い、屋敷に宿る霊のようなものは感じられない。今回の旅では、当初予定していた琉球村には行かなかったので、古い沖縄の世界を見られたのはよかった。

あと、ハブとマングースのショーと銘打っていたが、ハブとマングースの闘いは、動物愛護のために禁止されてしまった。名前を聞いてかつてのショーを期待した人は、落胆したに違いない。

水の入っている風船とお湯の入っている風船をハブに近づけ、体温と勘違いしたハブが襲いかかる実験は、ハブにやる気がなかったために、どちらの風船も割らなかった。

ハブとマングースの闘いの代わりに用意されていたのは、イラブウミヘビとマングースの水泳大会で、別の水槽に入れられた二匹に、ゴールまでの到達を競わせるものだった。調子抜けしてしまった人が多いことだろう。

もう時間がなかった、急いで入口に戻り、バスに乗りこむとすぐに出発した。次の目的地は琉球ガラス工房である。

開放的な工房では、職人が釜にガラスをつけた棒を突っ込み、火の色に溶けたガラスに、息を吹き込みながら形を整えていく。気の遠くなる作業を通して、繊細なガラス製品は作られていくのだろう。

展示室の入口は、見事なステンドグラスのドームとなっている。赤、青、黄の原色のガラスが、黒い編み目模様の中に組み込まれている。白い壁には教会風の窓が、やはり原色のガラスを組み合わせたデザインで配置されている。

入口で目を見張ったわけだが、中に入ると美術館に展示されているような、肩幅の大きさの大皿や壺などが並んでいた。青

い色に白い点がちりばめられた皿などは、宇宙にきらめく星座をイメージしているようだ。

　数万円どころか、百万円の値がついている物もある。美術館でなければ、王宮に飾られるような品々ばかりである。ガラスケースに収められていないものもあり、転倒して割ってしまったらということを考えると、近くに立っているだけでも緊張してしまう。

　奥の方には、庶民でも手の届きそうな、１万円前後のコップなどが売られていた。半透明の青い色に、植物をあしらったデザインのコップに、泡盛を注いで飲んだら、さぞいい気分になりそうだが、こちらも壊すのが怖くて、泥酔などできそうにない。

　今回の半日ツアーでは、平和記念堂やひめゆりの塔は、近くを通り過ぎただけだった。遠くに喜屋武岬（きゃんみさき）が見えた。沖縄戦で人々が集団自決に追い込まれた場所である。結レールの車両基地の横を通り過ぎ、那覇空港には午後六時前に到着した。

　飛行機は午後七時四十分発である。夕食は空港内のレストランで済ませることにした。来た日に入った店は、ラフテーが薄っぺらかったので、しっかり厚みがある肉が食べたかった。ショーウインドウの見本を見て、沖縄料理の店に入った。僕はラフテー丼、友人はラフテー丼と沖縄そばの半サイズのセットを食べた。

　まだ時間の余裕があった。すでにおみやげも買ってあったし。

モノレールに乗りたいと友人が言い出した。以前は首里までだったが、てだこ浦西（うらにし）駅まで延長されている。ただ、そこまで行って戻ってくる時間はない。ちなみに、「てだこ」というのは太陽の子という意味である。

「那覇空港駅が日本最西端駅で、次の赤嶺（あかみね）駅が日本最南端駅なんだ。それを一度に踏破できるんだ」と友人が言うので、乗ってみることにした。改札前に記念撮影用の看板があり、くり抜かれた穴に顔を突っ込み、写真に収めるようになっている。お互いに写真を撮ることにした。

　那覇空港のホームに上がった。跨座式（こざしき）のモノレールで、ポイントはレールと同じ太さのコンクリートである。カーブしたコンクリートが動くのは見ものだろう。スピードはそれなりにあ

り、急カーブが多いので、立っていると遠心力が体にかかる。

　赤嶺駅に到着したが、壁に日本最南端と書かれたプレートが掲げられているだけである。「なーんだ」と友人がぼやいたが、記録用に写真に撮った。

　本当はもっと先まで行きたかったが、時間的に難しそうだった。折り返して那覇空港駅に戻った。出発ロビーを探していると、階を間違えてしまい、うろうろしていたら、あと五分で検査場を通らないと、飛行機に乗れないことが分かった。いつもギリギリである。それでも間に合うんだから、まあいいか。

　ゲートの前に行くと、羽田行きの飛行機は搭乗が始まっていた。すでに外は暗くなっていた。生きているうちに、また沖縄に来たいと思った。

乗り込んだ席はやはり翼のあたりで、外の風景はよく見えそうにない。それにもう夜だから、羽田に近づくまでは何も見えないだろう。すぐに扉が閉まり、飛行機の移動が始まった。やがて離陸。わずかの間だけ那覇の街が見えた。

　今夜は本来の航空路を通るらしい。だから、陸地から離れた海上を飛んでいく。梅雨前線を通り過ぎる間はかなり揺れた。これが九州の南まで上がってくれていたおかげで、沖縄は梅雨明け後のような晴天に恵まれていたわけだ。

あとがき

　僕が沖縄を旅したのは、二十代の終わりと三十代の前半、まだ二十世紀だった頃である。それからもう二十年も経ってしまった。飛行機に乗ってしまえば、本島で二時間、宮古島でも三時間で着く。現在では石垣島への直行便も飛んでいる。とはいっても、島々をゆっくり巡るには費用も時間もかかる。本土から遠く離れているだけでなく、文化面でも本土とは異なる点が多い。

　沖縄の文化は中国を父、日本を母として育ったと言われる。食文化や住居を見ても、中国と日本を折衷したものが多い。琉球王国の時代、明や清に朝貢していたから、琉球国王は中国の

皇帝から冊封を受け、領内では中国の元号が使われていた。ただし、住民の多くは古代に九州から移住した人々であるとされ、文化の深層では日本人が忘れてしまった精神を伝えている。ウチナーグチと呼ばれる沖縄方言も、耳で聞いて分からないとはいえ、日本語の方言の一つである。その一方で、古代の日本とは異なる創世神話を持ち、祝女やユタなどの独特な宗教文化を育んできた。

ところが、琉球処分以降、本土の日本人は沖縄に対する差別感情を抱くようになった。これは琉球王国の時代、侵攻した薩摩藩が琉球の使節に対し、異国風に装うことを強要したこと、地名の漢字表記なども、分かりにくく改変してしまったこと、本土の日本語がほとんど通じなかったことなどが関係する。

それが第二次世界大戦における沖縄戦の悲劇を生む。日本人に同化することを強いられ、方言を話すことは厳しく禁じられた。地上戦が行われたために、県民の四人に一人は死亡したとされる。本土が形式的に独立した後も、アメリカによる統治は続き、日本に復帰した後も駐留するアメリカ軍基地の多くが、沖縄に集中するという結果を生んだ。そして今、辺野古（へのこ）に建設されようとしている基地をめぐって、反対する住民に対し本土の警官が多数送り込まれ、力尽くで抑え込もうという威圧的態度が問題となっている。本土の日本人は、いまだに沖縄の魂を傷つけているということを忘れてはならない。

こうした歴史的経緯（けいい）を考えると、気軽にリゾート地として訪れることができなくなってしまうが、沖縄には日本であって本

土にはない、魅力的な自然と文化が残っている。白い砂浜や珊瑚礁の海で遊ぶことは、青春時代の忘れられない記憶となる。ここにまとめたのは、僕が若かった頃に抱いた沖縄に対する複雑な思いである。最後に二回にわたる旅の行程を記しておこう。

第一回（一九九二年）

七月二七日　羽田発。本島真栄田泊。
七月二八日　国営沖縄記念公園見学。真栄田泊。
七月二九日　琉球村見学。那覇港発。
七月三十日　石垣港着。その足で竹富島へ。石垣島星野泊。

七月三一日　石垣島のイトマンジーで泳ぐ。星野泊。
八月一日　石垣港発。西表島上原港着。上原泊。
八月二日　浦内川クルーズ。上原泊。
八月三日　星砂の浜で泳ぐ。上原泊。
八月四日　上原港発。石垣港着。石垣空港発。那覇空港着。本島那覇泊。
八月五日　ひめゆりの塔・平和記念堂などを見学。那覇泊。
八月六日　首里城周辺を散策。那覇発。羽田着。

第二回（一九九七年）

七月二十七日　羽田発、那覇着。真栄田泊。

七月二八日　真栄田岬近くの砂浜で泳ぐ。琉球村、『琉球の風』のテーマパークを訪れる。真栄田泊。
七月二九日　首里城見学。玉陵に詣でる。那覇泊。
七月三十日　斎場御嶽を訪れる。久高島に渡る。那覇泊。
七月三一日　豊見城の海軍司令部壕を見学。宮古島に渡る。平良泊。
八月一日　伊良部島、下地島に渡る。仲宗根豊見親の墓に詣でる。西平安名崎に向かい、池間大橋で池間島に渡る。平良泊。
八月二日　来間大橋で来間島に渡る。イムギャーマリンガーデンで泳ぐ。平良泊。
八月三日　東平安名崎に向かう。宮古空港発、羽田着。

二〇一八年三月二十九日

髙野敦志

初めて沖縄を訪れたときは、まだ二十代だった。それから倍以上の月日が流れてしまった。今回の沖縄旅行はわずか二泊三日だったが、過ぎ去った時間を実感するには十分だった。街中で頻繁に聞かれたウチナーグチも、今回は沖縄風の共通語に変わっていた。

第三回（二〇二五年）

五月十八日　羽田発、那覇空港着。北谷泊。
五月十九日　真栄田岬、残波岬を訪れる。北谷泊。
五月二十日　玉泉洞、ガラス工房を巡る。那覇空港発、羽田空港着。

二〇二六年八月十二日

髙野敦志